
真・恋姫†無双～冷静と情熱の狭間～

§ K&N §

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜冷静と情熱の狭間〜

【Nコード】

N6996X

【作者名】

SK&N

【あらすじ】

俺こと北郷一刀は孤独だった。

両親と妹を事故で失い、じいちゃんに引き取られたが、じいちゃんも俺を残して逝ってしまった。

そしてあの日、俺はじいちゃんの遺言に従い一振りの刀を手にしたんだけど……………今思えば、あれが全ての始まりだったんだ。……………

手を抜くつもりはありません。

全力を尽くします。

原作より強く賢い一刀君が見たい方は、ぜひ読んでみてください！

prologue (前書き)

皆さんこんにちは！

§K&N§と申します。

よろしくお願いします！

prologue

ピッ、ピッ、ピッ、ピッ……………

心電図の規則正しい電子音を聞きながら、病室のベッドの脇にある椅子に深く腰掛け、俺はじいちゃんの手を両手で握っていた。

「じいちゃん……」

おもわず声が漏れる。

ベッドで静かに眠るじいちゃんは、医者の話では今夜が山らしい。

思い返せば、俺はじいちゃんがいなかったらどうなっていたんだろ
うか？

9歳の時に、両親と俺と妹が乗る車にトラックが突っ込み、両親と妹はこの世を去ったが、神の気まぐれか、俺だけが生き残った。

その後、親戚達と共に葬儀をしたけど、俺を引き取ってくれる人は誰もいなかった。

もともと俺の両親は駆け落ちをして結婚したので、親戚からしたら俺は厄介なお荷物だったらしい。

周りから冷たい視線を受ける中、そんな俺を引き取ってくれたのが
じいちゃんこと、北郷一心ほんこう いっしんさんだった。

じいちゃんは俺の父親の叔父に当る人で、性格は正に現代の生きる
侍そのもの。

北郷家の先祖が開祖である北郷御影流剣術の師範代をしていたが、
弟子もおらず、独身のまま鹿児島の山奥で修業に明け暮れ、親戚達
からもうとまれていたようで、厄介者は厄介者に任せるのが一番だ
つたらしい。

そして俺はじいちゃんに引き取られ、一緒に鹿児島で暮らすことと
なったんだけど、引き取られた当初、俺は事故のショックで心を閉
ざし、誰とも関わろうとしなかった。

そんな俺が立ち直ったきっかけは、じいちゃんが師範代を務める北
郷御影流剣術を始めたことだった。

地元の学校に通いながら、じいちゃんと共に剣術の修業に明け暮れ
る内、次第に心を取り戻し、5年の歳月を有したが、俺は両親と妹
の死を乗り越えることが出来た。

また、毎日剣術の修業に明け暮れる内に、どんどん腕も上がってい
き、つい半年前、15歳の誕生日に北郷御影流の免許皆伝をじいち
ゃんから言い渡された。

免許皆伝を言い渡した時、じいちゃんは喜んでくれたし、何より俺
自身認められたことは本当に嬉しかった。

そんな矢先、じいちゃんが道場で倒れた。

救急車を呼び急いで病院に向かい、診察を受けた。

その結果は心筋症。

長年に渡る激しい修業が心臓に負担をかけ、もはや心臓が限界らしい。

そして今に至る。

「うっ……」

目の前のじいちゃんの瞼が微かに開く。

「っ！　じいちゃん！」

おもわず身を乗り出し叫んだ。

「一刀か……」

普段のじいちゃんからは想像も出来ない程弱々しい声をあげる。

じいちゃん……もう永くないな……。

くそっ、泣くんじゃねえぞ俺！

笑顔で見送ると決めただろう！

「じいちゃん……体調はどうだ？」

俺は努めていつも通りを装う。

正直、気を緩めたら泣きそうだ。

「……………一刀」

「…何だ？」

「私はもう永くないのだろう…？」

「っ！？」

おもわず息が止まる。

「私の体のことは…私が一番わかる。」

やめろ。

「お前が立派な剣士になるのを見届けられないのは残念だが……まあ、致し方ないな。」

やめてくれ！

「……………フッ、何を泣いておる？」

「えっ？」

気付けば一粒の雫が頬を流れていた。

「一刀……私はお前に免許皆伝を言い渡した。だが、その証となるものをまだお前に授けていない。そうだな？」

「ああ……。」

「そこで、私はお前の師匠として、道場の神棚に奉つてある刀をお前に与え、それを免許皆伝の証とする。」

ゾクリとした。

じいちゃんのその言葉は、俺が真の意味で北郷御影流を継承するということに違いないのだから。

あの刀にはそれだけの価値があるのだ。

「……一刀、死とは人間であればいつか必ず訪れる別れだ。だが、それよりも大切なものがある。何だかわかるか？」

じいちゃんは臨終間際とは思えない程鋭い眼差しでそう俺に尋ねただけど……俺にはわからねえよ……。

「死んだら終わりじゃねえか……。」

もう涙は止まらない。

声も震えている。

「それは違う。終わりではない。私が死んでもお前がいる。お前は私の業を、剣士としての心得を引き継いだ。一刀、お前はもう、北郷御影流を修めた侍なのだ。」

衝撃的だった。

俺が……侍？

「良いか一刀、お前が学んだ北郷御影流もまた、そうして代々受け継がれたものなのだ。私が受け継いだそれもお前に渡せた。私はそれで満足だよ。」

そう言ってじいちゃんは穏やかに笑う。

「でも…俺はまだまだ未熟だよ？人に教えられる余裕なんてないよ。」

そう、未熟なのだ。

俺自身、侍と呼べる程、精神も業も完熟していないと思ってる。

ましてやそれを俺が誰かに伝えていくなんて……

「ハッ！そんなこと、今のお前に期待してなどいないわ。それにお前は、免許皆伝になったからといって、修業を止めるか？」

「それはない。断言出来る。」

「ならばそれで良い。お前自身が誰かに教えていけると思った時にやればよい。それまでは自らを高めよ。お前はこれからなのだからな。それに、たとえここで私の肉体が滅びても、魂はお前と共にある。だから大丈夫だ。」

ニツコリと笑いながら、じいちゃんは一通り言いたいことを言うと、疲れたように目を閉じた。

俺はこれから……そうだ。

俺は何をすべきか、これからゆっくり考えていけば良い。

もう涙は出ない。

悲しくないと言えば嘘になるが、それより今じいちゃんに伝えなきゃいけないことがある。

「じいちゃん……」

「……何だ？」

じいちゃんがこちらへ振り向く。

「この6年間、貴方から学んだことは俺の誇りです。本当にありがとうございました。」

じいちゃんの目を見てそう言って、深々と頭を下げた。

じいちゃんは驚いた顔をしていたが、すぐに笑顔になって、

「ああ……安心した……。」

そう呟いて、穏やかな顔をしながら永い眠りについた。

じいちゃんの葬儀は、亡くなった翌日に近所の方々が中心になって行ってくれた。

葬儀の様子を見て、あらためてじいちゃんがどれだけ近所の方々に慕われていたかがよくわかった。

それから一週間、親戚達に連絡をして回ったが、誰ひとりとしてじいちゃんの墓参りに来なかった。

まあ、俺もじいちゃんも、あんな薄情な親戚に来られても嬉しくないけどね。

そして一週間経った今、白い胴着に黒い袴を着た俺はじいちゃんの

道場にいる。

理由は一つ、じいちゃんから授かった刀、「千代桜」ちよんくらを神棚から降ろすため。

台座に乗り、神棚の刀を手取る。

ずっしりとした重量感は刀自体の重さだけでなく、歴史の重みもあるのだろうか。

それなのに、ぴったりと俺の手に吸い付く感覚もある。

鞘はワインのように赤黒いが、漆塗りなのか赤黒さを引き立てるように艶やかで、鐔には龍の彫刻が施しており、職人の技が際だっている。

そして、柄の部分には刀の名と同じ桜色の当て布が巻いてある。

じっくりこの千代桜を見たことはなかったけど、あらためてこの刀を手に取り、正直俺は気圧されている。

これが受け継がれ続けた重み。

だけど、俺はコイツを離すつもりはない。

じいちゃんの葬儀の時、俺はじいちゃんの誇れる侍になると決めた。

そのためには、今までのような木刀だけの鍛練じゃダメだ。

北郷家に代々伝わるこの刀を使いこなしてこそ、真の意味で北郷御

影流の継承者になれると信じている。

台座から降り、俺は道場の真ん中で立ち止まると、柄に手をかけた。

……じいちゃん、見ていてくれよ。

俺は……じいちゃんを超えてみせる！

高ぶる気持ちを抑えるように深呼吸をすると、俺はゆっくりと千代桜を抜いた。

シャリン、と金属が擦れる独特の音が道場に響いた。

そして、抜いた千代桜の刀身を見た時、俺は言葉を失った。

微かに青みがかり透き通った刀身は、鏡のように磨き貫かれており、その刃は触れたものの全てを切り裂くと思えるほど鋭利である。

なんて美しい……。

素直にそう思った。

だが、その時、異変は起きた。

キィィィン！

刀身からまばゆい光がほとばしる。

「ええっ！？ちょっ！？いきなり何が！？」

待て待て待て！

何だこれっ！？

ってか、これ刀に吸い込まれる！？

「うわああああ！！！！」

断末魔が道場に響く。

光が止んだ時、そこにはもう誰もいなかった。

prologue (後書き)

今作品の一刀君はそこそこ強いです。

ただ、現段階では一般兵より強いといった程度。

当然將軍クラスには太刀打ち出来ません。

徐々に強くしていきたいと思います。

そして、ネタバレになってしまいましたが、この一刀君の一番の売りは、御遣い補正がないことです。

まあ、要するにこの一刀君は天の御遣いなんていう胡散臭い存在にはならないということですな（ ; ; ）

なるべくご都合主義にはしないように気を付けますので、どうか皆さんも楽しく読んで頂けたら幸いです。

く第一話く侍、荒野に立つ（前書き）

一人称ムズイ（ーωー；）

とりあえず出来ました。

どうぞ！

く第一話く侍、荒野に立つ

「……っ……」

一体どれだけの時間気を失っていたのだろうか…。

目を覚ました俺は、先程のまばゆい光のことを思い出す。

刀から光が溢れ出るとか何てファンタジー？

何故千代桜から光が出たのか……考えてもわからないので、とりあえず自分の体に異変がないか確認することにした。

着ている服はさっきと変わらず、白い鍛練用の胴着に黒い袴。

見た目的に怪我もなく至って健康体である。

俺は自身の体に何の問題もなく、とりあえずは安心した。

まあ、安心はしたのだが……一つだけ困ったことがある。

一つと言ったものの、その一つが今のところ一番問題なのだ。

俺は一体誰に説明しているのかはわからないが、とりあえず、一つだけ言わせてくれ。

「ここ何処だああ……!」

俺の魂の叫びが虚しく荒野に響いた。

数時間後、とりあえず落ち着いた俺は、腰に下げた刀、千代桜を揺らしながら宛てもなく荒野を歩いていた。

ちなみに、千代桜は何故か鞘に納まって俺の足元に転がっていた。

……もう訳がわからん…。

俺の目の前には、見渡す限り荒野が広がり、遙か先には岩で出来た柱なのか山なのかよくわからないものが鎮座しているのみである。

「はあ……一体どうなってんだよ…？」

今日何度目かわからない溜息と呟きが漏れる。

その時、俺は遠くからこちらへ走り寄ってくる3人組を見つけた。

やっと人がいた！

宛てもなく歩くことにも飽きていた所だったので、俺は嬉しくなつて叫んだ。

「おーい！こつちだこつち！」

近付くにつれ3人の容姿がハッキリしてきた。

一人はガツシリとした体つきの中年の男で、その両隣には身長が小さくギョロ目の男と関取のように太った男という何とも凸凹した3人である。

そして、極めつけはその格好。

3人とも、黄色い頭巾をかぶり、簡易的な鎧まといのようなものを纏い、腰には中華風の剣を下げている。

………… コスプレだろうか？

まあ、格好に関しては現在の自分も人のことを言えないので黙っておこう。

それより、これでこの荒野から抜け出せる！

「良かった！実はこの辺りで迷っ」

「おう、兄ちゃん！金目の物があるなら大人しくだしな。」

ん？

この人達はそういうキャラのコスプレなのか？

なら！

「ふっ…俺を誰だと思っている？天下の剣豪、北郷一刀様だぞ！」

仮面ライダーの変身ポーズを取りながら、俺はそう叫んだ。

こういうの一度やってみたかったんだよな！」

だけど、目の前の3人は目を点にしてア然としている。

………やべえ……俺は何処で間違えた？

もしかして、この人達は大人し目の人なのか…？

「てめえが誰だか知らねえが、ふざけてるなら殺すぞ？」

中年の男が腰の剣を抜き、それに従い後ろの二人も剣を抜く。

………待て待て待て！

それ明らかに本物じゃねえか！

「ちよっ、コスプレじゃなかったの!？」

「こすぶれ？兄貴、コイツ何言ってるすかね？」

「ハッ、んなの知るか。おいガキ、良いから金目の物を出せ！」

ギョロ目の男が中年の男にそう言うが、中年の男はそれを鼻で笑いながら俺に剣の切っ先を向ける。

「………あれ？もしかして、アンタ真面目に言ってる…？」

そんな…まさか……。

「当たり前だ！良いから早く出せ！」

「出せ！なんだな……。」

中年の男と太った男がまくし立てる。

………オーケー。

少しクールになれ俺。

状況を整理しよう。

荒野で人発見↓金目の物よこせと言われる↓俺がふざける↓相手は
激怒して剣を抜く↓剣は本物↓真面目かどうか聞いて当たり前と言
われる。

ああ………なるほど。

「本物の強盗！？」

マジかよ！？

これ洒落にならない状況なんじゃ……。

「いやいやいや！見ればわかるでしょ！金目の物なんてないよ！」

携帯や財布とかは俺の部屋だし、だいたい金目の物なんて胴着に着

替えた時に全部置いてきたよ！

「ああ？あるじゃねえか。てめえの腰にある剣は何だ？」

腰にある剣？

……まさか、千代桜のことか……？

「…………それは…………それだけは出来ない。」

「…………何？」

中年の男は怪訝な表情している。

まさかこの状況でそんなことを言われるとは思ってなかったんだろ
うな……。

だけど、

「これはじいちゃんから授かった大切な刀だ。他の物だったらまだ
考えたけど、これだけはダメだ。…………どうしても言うなら……」

俺は千代桜の柄に手をかける。

そう、これだけは譲れない。

これは北郷御影流を継承した証だから……。

それを奪おうと言うのなら…………斬り捨てるまでだ！

俺は勢いよく千代桜を抜いた。

太陽の光に反射してキラキラと輝く刃を、俺は3人に向け正眼に構える。

俺の気配が変わったのを前の3人も気付いたのだろう。

それぞれ己の剣を構え直す。

だが、3人とも俺の気迫に負けて腰が退けている。

「おっ…おい！お前ら、行け！」

「っ！」「っ！」

中年の男に激を飛ばされ、後ろの二人が突っ込んできた。

…遅い。

「ぎゃっ！」

「へぶっ！？」

ギョロ目男が剣を振りかぶった瞬間、俺は開いた胴に横薙ぎの一閃をみまう。

そして、そのまま勢いを殺さず、遅れてきた太った男の胴を通り抜けざまに斬り捨てた。

ドサリと二人が倒れる音が聞こえる。

俺の眼前にいる中年の男は、目の前の光景に目を見開き、完全に戦意が喪失しているようだ。

「おい。」

「ひいつ!？」

俺が声をかけると、中年の男は引き攣った顔を向ける。

「その二人を連れてどっかに行きな。峰打ちだから死んではないないからね。」

俺はそう言いながら、倒れてる二人に目を向ける。

二人は痛がつて悶絶はしているものの、やはり死んではない。

「どうする？まだやるってんなら……」

刀を握り直してそう聞くと、中年の男は慌てた様子で倒れた二人を起こして走り去って行った。

「はぁ……」

溜息をつきながら、静かに納刀する。

まさか本物の強盗に襲われるとは……。

生まれて初めて強盗に襲われたけど、本当に千代桜持ってて良かった……。

でも何か忘れてるような気がするんだよね……。

……っ!?

「俺アイツらにここが何処か聞いてねえ!」

おもわず叫び声を上げ、頭を抱えた。

また振り出しかよっ!?

「ぐぬぬぬ……」

唸りながら己の馬鹿さ加減に自己嫌悪していると、ふと遠くから聞き慣れない音が聞こえた。

「これは……」

音の聞こえる方に目を向けると、遠くの方で砂煙が見える。

それにこの音は……馬の蹄の音だ。

音と砂煙はどんどん近付いてくる。

目を凝らしながら砂煙を凝視すると、何人もの人が乗っているのがわかる。

またさっきみたいに強盗紛いな奴じゃないだろうな…?

でも、このままじゃどうしようもないしなあ……。

仕方ない。

また声をかけるしかないか…。

「おい！」

俺は馬に乗った軍団に向け、大声で呼び掛けた

s i d e ? ? ?

「天の御遣い？」

私は部下の言葉に眉をひそめた。

「ここ最近、民達の間ではこの話題で持ち切りです。ここまで噂になっていると、あながちその噂も嘘ではないのではないかと私は考えています。」

我が部下、莉昂^{リョウ}は報告書を見ながら私にそう語りかける。

「ふむ……話はわかったが、貴公は私にどうして欲しいのだ？」

イマイチ意図が見えん。

こやつのことだ。

意味もなくこのような話をする奴ではない。

だが一体何が……？

「私の意見としましては……“天の御遣い”を見付け次第保護するべきかと。」

真剣な表情で莉昂は言った。

「何故だ？まさかその“天の御遣い”の威光を使い天下統一……なんて言わないだろうな？」

私は怪訝な表情を浮かべながら莉昂に問う。

そう、私に天下統一などという野望はない。

今、任されている幽州の統治ですらままならないのが現状なのだ。

故に、私にはこの大陸を統一するに値する器量はない。

それは私自身が一番よくわかっていることだ。

だからこそ、わざわざ“天の御遣い”を保護する理由がわからない。

「そうではありません。むしろ、幽州の周辺にいる諸侯に、“天の御遣い”の威光を使わせないために先手を打つのです。もし、義遠様が“天の御遣い”を保護した場合、周辺の民達に“我等は天の威光と共にこの地を統治する”とも言っておけば、諸侯達も迂闊に我等へ出兵出来ないでしょう。民達の反感はなるべく買いたくないでしょうから。」

莉昂は私の目を真つすぐ見つめてそう言った。

「なるほど……筋は通っているな。ところで、この話は他に誰が知っている？」

「今のところ、私と義遠様、そして権陽様だけです。」

権陽か……。

「その権陽はどう言っておった？」

「権陽様ですか？権陽様は、義遠様の判断に従うとのことでした。」

「そうか……。」

奴も反対しないということは、恐らくそれなりに効果があるという

ことなのだろう…。

「良かるう。この件は我が名の元、糜竺^{びつ}、貴公に一任する！」

「御意！我が主、陶謙^{とうけん}様の名に恥じぬよう、全力を尽くします！」

糜竺こと、莉昂はそう言って一礼すると、私の執務室から出ていった。

それにしても……天……か。

思い出すのはあの男。

たった2年だが、若かりし頃の私と権陽と共に戦場を駆け抜けた親友であり、流星と共に現れ、光の中に消えていった、誇り高き剣士。30年程経った今でも、あの男の姿は忘れられない……。

……いかな。

まだ政務が残っているというのに、感傷に浸ってなどおれぬ。

そう思いながら、私は机に乗る書簡に手を伸ばした。

side out

side ???

先程、莉昂から義遠様が“天の御遣い”を保護することに決められたという報告を受け、私はある思いを抱いていた。

恐らく、義遠様も同じことを考えていらっしやるだろう。

私と義遠様にとって、“天”という言葉は特別だ。

まだ私が10代半ばの、義遠様に仕えて間もないあの頃、ちょうどその時期に出会ったのが、彼だった。

たった一降りの剣のみで、現在の我等の未来を切り開いた恩人とも言えるお方。

流星と共に現れ、光の中に消えた彼は、まさしく天から遣わされたと言わざるを得ないほど気高かった。

たった2年の月日だったが、彼の考え方は今の私の根本とも言える程、影響を及ぼしてしている。

あれから30年、愛する妻と息子が出来るなど……あの時の私からすると想像も出来ないだろうな。

そう思いながら、私は一人苦笑していると、

「親父！入るぜ！」

乱暴に扉を開けて、我が息子が入ってきた。

「土陽……お前は礼儀というものを知らんのか？人の部屋に入る時は、一言声をかけろといつも言っているだろう。」

あまりにも礼儀知らずな入り方をする息子に呆れながら、私は息子を睨みつける。

「何怒ってんだよ。それに、ちゃんと声はかけたぜ。入るってな。」

我が愛する妻から受け継いだ赤髪を揺らしながら、何故か威張ってそう言う息子の姿に頭が痛くなる。

「……まあ、良い。して、用件は何だ？」

「“天の御遣い”の話だ。何でそんな胡散臭い奴を保護するために、俺がソイツを探さなきゃならねんだよ！莉昂の兄貴から、親父が俺をその役に推薦したって聞いたぞ！」

なるほど、そういうことか。

「それはお前が適任だからだ。賊風情には遅れを取らぬ実力を持ち、かつ我が軍で単独で動き回れるのはお前だけだ。だからお前を推薦したのだ。」

私がそう言つと、土陽はいかにも不服そうな顔をする。

「おいおい、何で俺が単独で動けるんだよ。俺の部隊はどうすんだ？」

確かに最もらしい言い方だが、私は知っている。

「ほう…？お前、私が知らぬとも思っているのか？お前の部隊はほぼ莉昂が調練しているそうじゃないか？」

「うつ！？」

気まずそうな顔をする士陽。

士陽が調練をサボっている話はすでに所々から聞いている。

まったく……その話を聞かされる私の身にもなれ、馬鹿者が！

「いや、あのな親父？あれは莉昂の兄貴が……」

「言い訳はいいから、とつと準備をせぬか！この馬鹿者め！」

「りよつ、了解！」

慌てて私の部屋を部屋を出る息子の姿に、おもわず溜息を漏らす。

その時、扉の外に人の気配を感じた。

「陳珪様^{ちんけい}、入ってもよろしいでしょうか？」

「構わん、入れ。」

そう命じると、部下が部屋に入ってくる。

「あの……ここに来る前に、陳登殿^{ちんとう}が半泣きで走り去って行きました。が……大丈夫なのですか？」

「……構わん、ほって置け。」

息子の情けなさに再び頭痛を感じるが、無視して部下からの報告に私は耳を傾けた。

side out

side 陳登

親父からの指示―という名の命令―で、俺はここ数日、幽州内のあらゆる場所で、“天の御遣い”に関する情報を探した。

莉昂の兄貴からは、もし本人を発見したら、至急城に連れて来いって言われた。

だが、得る情報はいつも一緒に、有名な占い師がそう言ったからだそう。

……兄貴よ、いくらなんでも無謀過ぎねえか？

つか、占い師マジでふざけんな！

てめえが適当なこと抜かすから、俺がこんなことする羽目になった
だろうが！

だいたい、容姿なり持つてる物なり、何かしらの情報がねえと探し
ようがねえよ！

まあ、何の情報もないからこそ、誰かが集めなきゃいけないんだろ
うけど……。

何もそれが俺じゃなくても良いだろうが！

しかも兄貴も情報を集めてるなら、俺の意味なくねえか！？

心の中で一人ぶつくさと文句を言いながら、俺は馬の上で顔をしか
める。

「これだけ探していねえんだ。帰っても文句は言われねえはずだ。」

そう独りごちて、俺は眼前にある義遠様の城に目を向けた。

視線を下げると、俺の乗っている馬も疲れの色が見える。

「ありがとな。もうすぐ城に着くから、着いたらゆっくり休みな。」

俺はそう言って馬の首をさすってやる。

その時、東の空からまばゆい光が辺りを包んだ。

「っ！？何だ！？」

太陽ではない。

太陽の光はこんなに白くまばゆくないから。

俺は東の空を見上げると、空から光の筋が降っている。

「あれは……流星！？」

おもわずそう叫んだ俺は、そのまま流星を見ていると、城から3里ほど離れた場所に落ちたのを確認した。

あそこは確か、荒野が広がる場所だったな……。

まあ、何でも良い。

今は親父達に知らせる方が先だ！

「悪いな、もう少し頑張ってくれ！」

俺はそう言って馬の腹を軽く蹴って、急いで城に戻った。

s i d e o u t

またもや突然乱暴に扉を開けて入ってきた息子に、今度こそゲンコツの一発でもくれてやろうとしたが、息子の話を聞いて、私は義遠様の下へ急いでいた。

“天の御遣い”の話、そして動乱の予感漂うこの後漢の時代、そして先程息子から聞いた流星の話。

いくらなんでも話が出来過ぎている。

これではまるで、30年前の状況と同じではないか！

まさか……あの流星は彼だというのか！？

逸^{はや}る気持ちを抑え、義遠様の部屋へ飛び込む。

「義遠様！」

「おお！権陽か！」

義遠様はもうすでに出陣の準備を終えているようだ。

義遠様の横には、莉昂も控えている。

「義遠様、士陽の話はもうお聞きになられましたか？」

「うむ……権陽、貴公はどう思う？」

複雑な心境なのだろう。

義遠様は顔を歪めながら私に聞いてくる。

「……正直、私も複雑です。あまりにも30年前と状況が似過ぎています。それに、流星の話が本当なら……“彼”の可能性も否定できません。」

私がそう言つと、義遠様は頷きながら私の意見に賛同する。

「やはり貴公もそう考えるか……。何はともあれ、実際に行つてみなければわからん。莉昂、城のことは貴公に任せる！義遠、貴公は私と共に、私の騎馬隊で流星が落ちた場所に急ぐぞ！」

「「御意！」」

side out

side 陶謙

あれから急いで出陣した我々は、土陽の言っていた城から3里ほど離れた荒野に来ていた。

「土陽、本当にこの辺りに流星が落ちたのか？」

隣で馬に乗る権陽が、士陽に確認している。

「間違いねえよ。あんな異常な物が空から降ってきたんだ。忘れる訳がねえ。」

そう言つて、士陽も辺りを見渡す。

士陽は弓の名手である。

故に、その目の良さは信用に値する。

その時、

「っ！？親父、北東の方向に誰がいるぞ！」

「何っ！？義遠様！」

私は士陽が言つた方向に目を凝らす。

……確かに、人影のようなものが見える。

「全軍、進路を北東に向け前進！」

まさか……本当に奴が帰ってきたというのか。

しばらく馬を走らせると、徐々に人影の姿が私の目にも見える程ハッキリとしてきた。

どうやら男のようだ。

それと同時に、向こうもこちらを呼んでいるのがわかる。

そして、男のすぐ側まで寄り馬を止め、あらためて男を凝視して、胸が締め付けられるのを感じた。

私の記憶が正しければ、男が着ているのは胴着、袴と呼ばれる服であり、その腰に下げているのは……………千代桜という名の刀剣であったはず。

隣をちらりと見ると、権陽も目を見開いて驚愕している。

まあ、そうであろうな。

私もかなり驚いている。

何せあの刀剣……………あれの所有者は、私の知っている中ではただ一人。

30年前、光の中に消えた我が親友、“北郷 一心”が持っていた物なのだから……………。

s i d e o u t

s i d e 一刀

俺の前で馬を止めた人達は、今だ何も言わずただ俺を見ている。

まあ、ぱつと見た感じ、さっきの奴らよりは気品を感じるし、強盗の類いではないだろう。

でも、何でさっきから何も言わずこっちを見るだけなんだろう？

特に真ん中にいる二人はすごく驚いた顔をしているのが、傍から見てもわかる。

うーん………気まずい。

とりあえず、声だけかけてみるか。

「あの………実は道に迷ってしましまして、助けて頂けないでしょうか？」

俺の声を聞いて、真ん中の二人はビクリと体を震わせた。

その二人の内、じいちゃんと同じくらいの歳の、髭を伸ばした老人が馬を降り俺に近付いて、一言呟いた。

「………一心」

その一言に、俺も驚愕する。

「じいちゃんを知ってるの!？」

「じつ、じいちゃん？」

目の前の老人がまた驚いた顔をする。

この人、じいちゃんの知り合いなのかな？

良かった！

こんな訳のわかんない場所で、じいちゃんの知り合いに会えるなんてラッキーだ！

「あつ……まだ俺の名前を言っでませんでしたね。」

名を名乗る前からこんなに馴れ馴れしくしたら失礼だ。

じいちゃんがくれた誇り高い名を、ちゃんと名乗らなきゃな。

「俺は、北郷御影流剣術継承者、北郷 一刀です!」

向こうに控える方々にも聞こえるよう、俺は大きな声でそう言った。

「北郷 一刀……？それが貴公の名か？」

目の前の老人は依然として目を丸くしながらそう問いかけてきた。

「はい。それで……貴方は？」

「っ！？これは失礼した。私は陶謙、字は恭祖^{きょうそ}。今はこの幽州で刺^し史を務めさせてもらっている。」

……ちよつと待て。

今このご老人は何て言った？

俺の記憶が正しければ、陶謙って三国志にいたよな？

ってことはアレか？

さっきの黄色い頭巾の奴らは黄巾賊か？

なるほど、だから本物の剣なんて持ってたのか。

ハハッ、つまり俺はタイムスリップしたわけだ！

「どこまでファンタジーなんだコンチクショオオオオオオオ！！！！」

目の前の陶謙さん達は、どうしていいかわからず目を白黒させるのみだった。

く第二話く侍、荒野に立つ（後書き）

オリ設定満載ワロタなんですけど、大丈夫ですかね？

うーん、不安だ（-”-）

く第二話く侍、師の駆けた軌跡を知る（前書き）

ねつ造し過ぎたwwwwww

正史の陶謙はこんな良い人じゃないらしいですねww

まあ、とりあえず第二話をどうぞ！

く第二話く侍、師の駆けた軌跡を知る

side 一刀

とりあえず落ち着いた俺は、陶謙さん達に連れられ、城に向かって
いた。

それにしても、まさか三国時代にタイムスリップするとは……我な
がら稀有^{けう}な体験だと思う。

まあ、依然として何故こうなったのかは皆目見当もつかない。

しかも、陶謙さんはどうやらじいちゃんを知っているようだ。

これまた何で知っているのかわからないけど、とりあえず、じいち
やんの知り合いに会えたってのは不幸中の幸いだと思うことにした。

まあ、そうじゃねえとやってらんねえってのが本音だ。

だけど実際、今俺はこの世界にいる。

ぶつくさ文句を言っても、何かが変わるわけでもない。

それに真の侍ならば、どんな場所にいても冷静なはずだ。

だから、とりあえず、しばらくは陶謙さんにお世話になろう。

俺は心にそう決めると、隣で馬を走らせる陶謙さんを見る。

先程までは少々取り乱していたようだけど、今はただまっすぐ前を見て、眼前に迫る城を見つめている。

ちなみに、俺は今馬に乗っている。

修行の一貫として、じいちゃんから馬術を習っていたから、当然俺は馬に乗れる。

車やバイクがあるこのご時世、馬なんて乗る機会はないだろうなんて思ってたけど、まさか今そのスキルがフルに活用されるとは……
…本当、じいちゃん様々である。

「北郷殿……っとお呼びして良いかな？」

隣にいる陶謙さんがそう言いながら俺を見ている。

「あつ……じいちゃん……じゃなかった。我が師の知り合いのお方であるならば、私のことは一刀とお呼びください。」

そう、この人がじいちゃんの知り合いの人であるならば、失礼などあつてはならない。

それはじいちゃんの顔に泥を塗る行為だ。

そんなこと、俺自身許せるわけがない。

「そうか……ならば一刀、もうすぐ城に着く。着いたら君と話がしたいのだが、良いかな？」

「はい、私としましても、陶謙様に色々とお伺いしたいことがあります」

ます故、その提案をお受け致します。」

「うむ、では着いたら私の侍女を君の下に向かわせる。君は彼女の案内に従ってくれ。」

「承知しました。」

俺がそう答えると、陶謙さん……いや、もう陶謙様と言った方が良
いか。

とにかく、陶謙様は満足げに頷いて再び前を向く。

そして、城門が開くと、軍団は城内に入っていった。

さて、どうなることやら……。

s i d e o u t

s i d e 陶謙

城内に着き、侍女に一刀の下へ向かうよう指示を出し、私は自室で
ある執務室に足を運んだ。

私の後ろには権陽も控え、いつでも話が出る程には落ち着いてい
るようだった。

執務室に着き、会議用の円卓に座る。

隣に座る権陽に、私は声をかけた。

「権陽、貴公は一刀を見てどう思った？」

権陽は少し考えるそぶりを見せ、そして口を開く。

「……私が若かりし頃に見た一心様にそっくりです。そして、本人も一心様をじいちゃんと呼んでいる事から、一心様の親族と見て間違いないでしょうな。」

「ふむ……やはり貴公もそう思うか。」

「はい。それに、彼の腰に下がっていた刀剣、あれは一心様が持っていた千代桜です。」

「ふむ……」

やはり権陽とは同じ結論に至ったようだな……。

まあ、何にせよ聞いてみなければわからんか……。

その時、扉の外から侍女の声が響いた。

「陶謙様、北郷殿をお連れしました。」

「うむ、通せ。」

扉が開き一刀が入ってくる。

そして、こちらに向かって歩く姿は隙がなく、かつての親友の姿を思い出す。

なるほど……流石は一心の弟子といった所か。

「ご苦労だったな。とりあえず、座りたまえ。」

「はい、失礼します。」

そう言つて、一刀は腰に下げた千代桜を円卓に立て掛け、一礼すると静かに座る。

ふむ……まあ、一心が弟子に礼儀を教えていないわけがないか。

さて、どんな話が聞けるのやら……。

s i d e o u t

s i d e 陳珪

「はい、失礼します。」

そう言つて彼は一礼すると静かに座る。

その動作に無駄はなく、礼儀作法も抜かりはない。

流石は一心様の弟子。

……どこかの馬鹿息子に垢を煎じて飲ませてやりたい所だが、恐らく無駄であろう。

まったく……私はどこで教育を間違えた？

……まあ、良い。

今はそんなことより彼だ。

雰囲気はどことなく一心様に似ているが、まだ幼さの残る顔立ちで、未熟さが隠しきれていない。

しかし、その眼光は鋭く、彼が一心様の弟子であることは良くわかる。

「まずは陶謙様、この度は私のような者を城に招いて頂き、厚く御礼申し上げます。」

そう言つて彼は義遠様に頭を下げた。

本当に礼儀の良く出来た子だ……。

隣にいる義遠様も感心している。

まあ、一心様が鍛えた子ならば当然と言えば当然だが……。

「うむ、気にせんでよい。して、一刀よ。話をする前にいくつか確認するが良いかな？」

「はい、構いません。」

義遠様の問いかけに彼は真つすぐ目を見て答える。

「まずは、我等が知っている北郷 一心は、北郷御影流剣術継承者かつ師範代であつたと記憶しているが、相違ないか？」

「はい、間違いありません。」

「では、彼が持っていた刀剣は、君が持っている刀剣に良く似ていたが、その刀剣の名は何と言う？」

義遠様が彼の剣に目を向ける。

「これですか？」

彼は脇に立て掛けた刀剣を手取る。

「……これは我が北郷家に代々伝わるもので、北郷御影流剣術継承者しか持つことの許されない刀です。名は千代桜。私はこれを、北郷御影流免許皆伝の証として、師から譲り受けました。」

愛おしそうに千代桜を見る彼の姿からは、本当に大切な物なのだという感情が伝わってくる。

「……権陽、これはもう間違いないと見て良いだろうか？」

義遠様は私を見てそう言う。

「はい、よろしいかと。彼の説明を聞く限りでは、我等の知っている千代桜の話と相違点は見られません。」

間違いない。

彼は本当にあの一心様の弟子なのだ。

私は胸が熱くなるのを感じる。

「ふむ……一刀よ。どうやら我等の知る一心と、君の知る一心は同一人物のようだ。……感慨深い物だ。」

義遠様はそう言って顔を伏せた。

恐らく、一心様を思い出しておられるのだろう……。

「あの……陶謙様？とりあえず、お隣の方は何とお呼びしたら……？」

彼は困った表情で義遠様にそう言う。

私としたことが……そういえばまだ名乗っていなかったな。

「失礼した。我が名は陳珪、字は漢瑜^{かんゆ}。今は義遠様の将として仕えている。」

「ありがとうございます。すでに知っておられるでしょうけど、私の名は北郷 一刀です。字はありません。」

そう言つて、彼、一刀は私に頭を下げる。

本当に良く出来た子である。

あのくらいの歳でここまで出来る者は中々いない。

それを平然とやってしまう辺り、一心様と良く似ている。

「ところで、お二方は私の師とどういったご関係で？」

不思議そうな表情で一刀が問いかける。

「まあ、至極当然の疑問だな。」

義遠様は納得したような表情でそう言われた。

「さて……何から話したら良いものか………」

そう呟く義遠様はとても穏やかな顔だった。

side out

陶謙様が話された内容は、俺にとって驚愕に値するものだった。

話を要約するところだ。

30年前、俺と同じように――まあ、俺自身自覚はないが――流星に乗って現れたのがじいちゃんだった。

陶謙様は突然のことに慌てたが、じいちゃんと話す内に意気投合。

じいちゃんは陶謙様と行動を共にし始め、ちょうどその頃に陳珪様とも知り合ったらしい。

当時、陶謙様はこの幽州で治安維持のため、軍を率いて賊討伐を行っていた。

そこに協力したのがじいちゃんだった。

話を聞く限りでは、じいちゃんの実力は当時からかなり高かったらしく、その活躍は一騎当千だったそうだ。

そして、じいちゃんが陶謙様と行動を共にしてちょうど一年がたった頃、後漢皇室から直々に陶謙様へ指令が下る。

その内容は、韓遂という者が起こした後漢皇室への反乱を鎮圧せよとのことだった。

陶謙様達は直ちに軍を編成し、韓遂の反乱軍がいる涼州へ出陣した。出陣した当初、まだ反乱軍の勢いは凄まじく、陶謙様達も負けが続いた。

しかし、陶謙様達はそれでも一年あまり戦い続け、徐々に反乱軍の勢力を削っていった。

流石に反乱軍も、一年にも及ぶ戦いによって受けた損失は甚大であり、士気もかなり下がっていた。

そこにトドメを刺したのがじいちゃんだった。

この時じいちゃんは將軍として陶謙軍に参加。

北郷隊と名付けた隊を率いて反乱軍と衝突し、見事に韓遂を討ち取った。

こうして一年にも及ぶ反乱軍との戦も終わりを迎え、陶謙様はこの功績として幽州刺史を務めることになった。

陶謙様はじいちゃんに何か役職を与えようとしたが、じいちゃんはそれを全て辞退。

そして、じいちゃんは元いた世界でやらねばならぬことがあると言に残し、じいちゃんを迎えにきたと言う妖術師と共に、光の中に消えていった。

これが陶謙様の話した全容だ。

「その後、私の師とは……？」

「一度も会っていない。私も権陽もな……。」

陶謙様がそう言つと、目の前の二人はとても寂しそうに笑う。

二人にとって、じいちゃんがどんな存在なのかはよくわかった。

そういえば、以前じいちゃんから、私には、今は離ればなれになっているが、心の底から信用できた者達がいる、という話を聞いたことがある。

それって、陶謙様達のことだったのかな……。

「して、今は一心はどうしているのだ？」

陶謙様の問いかけにドキリとした。

でも……こればかりは言わなきゃダメだよな。

「師は……一週間前に亡くなりました……。」

俺は覚悟を決め、二人にそう伝える。

「なんと……！」

「一心様が……！？」

二人は目を見開き驚いたようだが、やがてすぐに沈痛な面持ちになった。

「そうか……アイツは逝ってしまったか……………」

陶謙様は落胆した様子でそう呟く。

隣の陳珪様はア然として言葉も出ないようだ。

俺は二人の様子に、不謹慎ながら嬉しくなった。

向こうの世界では、近所の方々以外、じいちゃんは時代遅れの変人として親戚達や様々な人たちにうとまれていた。

ただどこっちの世界は、じいちゃんの実力を正しく理解し、素直に認めてくれる人がいる。

それだけで、俺は胸が熱くなって涙が出た。

「っ!?!……すまぬ。君にとっても辛い話だったな。」

陶謙様は俺の顔を見て申し訳なさそうにそう言う。

「いえ……そうではないのです。ただ、この世界ではちゃんと師が評価されていることが嬉しくて……………」

俺が涙を拭いながらそう言うと、二人はとても驚いた表情をした。

「なんと……天の世界はあれ程の男が評価されないのか!?!」

「馬鹿な……一心様が評価されないとは……………。天の世界はどうなっているのだ?」

二人は信じられないとでも言いたげな表情で俺を見る。

まあ、この世界の住人ならそういう反応になるだろうな。

なんせ俺達の世界とは常識も違う。

……話してみるか。

俺達の世界のこと、親戚達のこと、今までのこと。

俺はそう決めて、二人に語り始めた。

s i d e o u t

s i d e 陳珪

一刀の話により、天の世界のことはだいたいわかった。

確かに、そこまで平和ならば、武を学ぶ必要はないのかもしれない。
だが、それと一心様が評価されないことは別問題だろう。

しかもそれが親族達なのだから、なんと愚かなことだろう。

しかし、私はそれよりも衝撃を受けたことがある。

一刀のことだ。

同じ子を持つ親として、私は親族達に怒りを覚えた。

例え親がどんな者であっても、子供に罪はない。

にも関わらず、一刀をほって置いた親族達は、人として間違っている。

そして、その時一刀に手を差し伸べた一心様は流石である。

だが、その一心様も亡くなり、とうとう一刀は一人ぼっちだ。

親戚からは愛してもらえず、唯一愛情を注いでくれた一心様はもうこの世にはいない。

あまりにも可哀想ではないか。

我が恩人たる一心様が大事になされた一刀が、こんな哀れなことになる。

私に何か出来ることはないのか？

その時、私は心の中である思いが生まれた。

「一刀、君はこれからどうするのだ？」

私の問いに一刀は考えるそぶりを見せる。

「……突然だったので、特に考えがあるわけではないですね。」

「なるほど……。ならば、私の家に来ないか？」

そう言うと、一刀は驚いたように目を見開いた。

「良いのですか？ご迷惑になるのでは？」

まったく……心配りが出来るのは良いが、少し自分を蔑にし過ぎなのではないか？

そういう所も含めて色々教えてやらねばならぬと思う。

それに、一心様への恩返しの意味合いもある。

一心様は様々な面で私を育ててくれた。

今度は私が一刀を育てる番だ。

「構わぬよ。私の家にも君と同年の子がいてな。仲良くしてくれると嬉しい。義遠さまも、そういうことでよろしいですか？」

私は隣で静かに様子を見ていた義遠様に目を向けた。

「良いのではないか？私は貴公の判断に任せるさ。」

義遠様は納得した表情でそう言う。

「では……よろしくお願い致します。」

そう言って、一刀は私を見ながら頭を下げた。

s i d e o u t

s i d e 陳登

流星の件があつた日から一週間がたった。

当初の予定通り、義遠様が天の御遣いを保護したんだが……

「土陽、これはここで良いのか？」

何故かその天の御遣いは俺の家にいる。

「お前……よく働くな……。」

「そりゃあそうさ！タダで住まわせてもらってるんだ。このくらいやらないと罰が当たっちゃう！」

ニツ、と笑いながら、一刀は酒の入った木箱を蔵に置く。

最初、一刀が来た時はかなり驚いた。

普通ならば、保護対象者は城の客室に住まうはずである。

にもかかわらず、何故か俺の家に居候することになったらしい。

初めは真面目で固い奴なのかと思ったが、意外と気さくで面白い奴だった。

俺はすぐに一刀を気に入り、真名を教えたが、真名を知らないと言われた時は流石に焦った。

そんな奴いるのかと思ったが、天の国では真名なんてものはないらしい。

真名の意味を教えた時は、かなり驚いていた。

どうやら、義遠様の真名を言おうと思っていたらしく、言ってもいないのに焦っていた一刀の姿は笑えた。

そんなこんなで今に至るが、親父から一刀の事情を聞いた時、大事にしてやろうと思った。

だつてそつだらう？

頼れる家族がないなんて、悲しすぎる。

俺はよく親父と喧嘩のような言い争いをするが、一刀はそんな相手
すらないのだ。

ならば俺がそんな相手になれば良い。

嬉しい時に共に笑い、悲しい時に共に泣き、悔しい時に共に怒る。

これから先、どう転がっていくかわからねえが、俺は一度“友”と
決めた者を見捨てたりしねえ。

だから、これからも仲良くしていこうぜ、一刀。

く第二話く侍、師の駆けた軌跡を知る（後書き）

士陽君に親友フラグが立ちました。

まあ、ウチの陶謙さん達はこんな感じです。

外史ってことで勘弁してくださいwww

く第三話く侍、命の重さを知る（前書き）

お待たせしました！

第三話です。

では、どうぞ！

第三話 侍、命の重さを知る

side 一刀

陳珪様の屋敷に居候し始めてから、はや三カ月が過ぎようとしていた。

季節的にはもう秋も終わり、冬の足音が聞こえ始めている。

この世界に来て、俺は最初に文字を習うことにした。

この世界の文字は、陳珪様の奥様である美玲様みれいに教わっている。

俺も驚いたんだけど、美玲様の本名は盧植ろしよく、字は子幹しかん。

正史で若き日の劉備と公孫賛を教え導いた、あの盧植である。

陳珪様とは幼い時から知り合いだったそうで、結婚することを約束した仲だったのだという。

でも、両家の親はそんなことを認めておらず大反対だったが、それでも二人は結婚することを諦めず、極秘裏に結婚し土陽を出産した。

しかし、極秘裏の結婚だったため、官職を辞めることが出来ず、美玲様は仕方なく廬江太守ろこうを続けた。

そして二年前、美玲様本人の意思とは別に、四府からの推挙を受け北中郎將に任命され、軍を率いて黄巾賊の討伐に向かっていたのだ。

が、ちょうど靈帝が小黄門の左豊を軍の監察の使者として派遣してきた。

左豊は美玲様に賄賂を要求したが、美玲様はこれを断つたため、左豊は靈帝に「盧植は戦おうとしない」と讒言した。

美玲様は怒った靈帝により罪人に落とされ、死一等を免じて官職剥奪で収監されることとなったが、その時動いたのが陳珪様である。

陳珪様は、美玲様が囚人車で都に護送される途中、賊になりきりこれを強襲し、護衛の者達を皆殺しにした後、美玲様を奪還。

陶謙様の領地まで引き返すと、美玲様を人目から遠ざけさせ、世間に「盧植は賊に襲われ死亡した」という噂を流し、追っ手の者達の追跡を見事にかわした。

その後、美玲様は真名である“美玲”を名乗り、陳珪様の下で静かに暮らしている。

……何というか、波乱万丈という言葉しか出てこない…。

でも、俺はあの盧植に学問を教われるんだから、幸せ者なんだろうなあ……。

そんなこんなでちょうど先程、俺は美玲様に教わりながら今日の分の学習を終わらせ、今は土陽と兵専用の食堂で昼食を取っている。

「お前は毎日よく飽きないよな……。俺だったら三日で逃げ出す自信がある。」

ポニーテールにした赤髪を揺らしながら土陽はそう言って、その手に持つ肉まんにかぶりつく。

「別に俺だって好きであんなことしてる訳じゃないさ。だけど文字が読めなきゃ不便だろ？」

「あん？別にそんなことねえだろ。文字の読めねえ奴なんか、この世の中には沢山いるが、皆それでも遅しく生きてるぜ？」

「そうかもしれないけど、俺がそんなんじゃ、いつまで経っても陳珪様の政務の手伝いが出来ねえだろうが。」

俺が器の中の麺を啜りながらそう言つと、土陽は「うわ……」と言つて顔をしかめる。

「真面目だねえ……。もっと俺みたいに楽しく生きれば良いのに。」

「こればかりは性分だから仕方ねえだろ？だいたいお前の場合、ただ単にサボってるだけじゃねえか！」

「おいおい、失礼なことを言うなよ？俺だって必要なものには参加するさ。他は必要性を感じないだけ。まあ、要するに要領が良いんだよ、俺は。」

「……ものは言い様だな……。」

からからと笑う土陽に呆れながら、俺はそう呟いた。

昼食後の一休みを終えた俺達は、鍛練場に来ていた。

「さて……両者共に準備は良いか？」

陳珪様は俺達二人に視線を向ける。

「いつでも良いぜ！」

士陽はそう言ってその手に持つ漆黒の青龍偃月刀、はく覇黒を構える。

「こちらと同じく。」

俺は腰に下げた千代桜を抜くと、正眼に構えた。

「良いな？では……始めっ！」

陳珪様の合図と共に、俺達は地面を蹴った。

「うおおおおっ！」

叫び声と共に、士陽が覇黒を振り下ろす。

「っ！」

それに反応し、俺が素早く右側に避けると、覇黒が地面を割った。

その隙を逃すはずもなく、俺はガラ空きになった胴に横一閃を放つ。

が、それで終わることなく土陽が体を捻り、体勢を崩しながらそれをかわす。

それを見て、俺は縦横無尽に剣撃を繰り出すが、土陽もそれに対応し覇黒を繰り出した。

一合、二合、三合、四合、…………。

絶え間無く激しい打ち合いが続く。

だが、俺は打ち合いには少々自信がある。

北郷御影流の教えの一つ。

『打ち合いになったら敵の初動を狙え』

日本刀というのは、よく世界最強の刀剣と言われるが、無敵ではない。

数多く打ち合えば刃が欠けてしまうし、かなり強い衝撃を受ければ当然折れる。

だからこそ、初動を狙うのだ。

初動の段階では、まだ力の籠った一撃を放てない。

故に、刀の負担を減らせるし、相手に主導権を渡さないのだ。

まさに、素早く小回りの効く刀だからこそ出来る業^{わざ}である。

打ち合いが二十合を過ぎた辺りから、土陽は強引に覇黒を押し込んでくる。

だが、俺は愚直に初動を狙い、隙が出来るのをひたすら待つ。

たまらず土陽は一気に後ろに下がり、一旦間合いを取った。

「はあ…はあ…はあ…相変わらず…はあ…やらしい…はあ…攻め方だ…はあ…」

息を整えながら、土陽はそう呟く。

「はあ…はあ…きついけど…それが…はあ…俺の…はあ…戦い方…だからね…はあ…」

俺は肩で息をしながらそう言った。

そう、きついのだ。

初動を狙うということは、相手の動きを読み、より素早く判断し対処しなければならぬ。

それ故、体力の消耗が激しいのだ。

「ふう…まどろっこしい打ち合いはもうやめだ。次で決める。」

そう言って土陽は突きの構えを取る。

俺は千代桜を下段に構え、間合いを取る。

土陽が一本前に足を出せば俺が下がり、逆に俺が一本前に出れば土陽が下がる。

互いの間合いの探り合い。

互いに一瞬でも気を抜けば、一気に間合いを詰められ、討ち取られる。

周囲が張り詰めた空気になり、静まり返っている。

その時、土陽が突然動き出した。

「はっ！」

俺は足に力を込め、一気に間合いを詰める。

北郷御影流の奥義の一つ。

歩法『蛇歩^{だうぽ}』

獲物に狙いを定めた蛇の如く、地を這うように一瞬で敵の懷に潜り込む、神速の歩法である。

「はっ！」

俺は土陽の覇黒が突き出される前に下段から斬り上げ、覇黒を弾き飛ばした。

無防備になった土陽に千代桜を突き付ける。

「勝負ありだな？」

ニヤリと俺は笑った。

「それまで！」

陳珪様の声が鍛練場に響き渡った。

「チクシヨー！あとちよつとだったのに！」

士陽はそう言つて、そのままその場に寝転がった。

「馬鹿者が。その短気な所がお前の欠点なのだ。間合いもしつかり取れてない内から突っ込んでどうする。」

陳珪様は呆れたようにそう言い放つ。

「だけどよお、一刀のあの歩法は反則だろ？避けねえよ、あんなの。」

士陽はふて腐れた顔で俺を見る。

「まあ、確かに一見そうかもしれないけど、実はいくらでもやりようはあるんだぜ？なんせ、蛇歩は真っすぐにしか進めないからね。」

そう、一見無敵の歩法のように見えるが、実は欠点も多い。

その一つとして、真つすぐしか進めないというのがある。

真つすぐしか、それも精々10メートル程しか進めないの、蛇歩を出す直前の体の向きで、動きを予測されれば終わりなのだ。

それに、もし避けられると、急激な加速により視界がぶれ、一瞬敵が認識出来なくなり、大きな隙が生まれてしまう。

このように弱点も多いのだ。

「もし、土陽がこれを見抜けていたら、俺は負けた可能性だってあったんだよ。」

「一刀の言う通りだ。お前はもう少し冷静になれ。これが戦場だったらお前は死んでるぞ?」

「そうは言ってもよお、俺は敵を観察してその弱点を突くなんて出来ねえよ?ましてや戦闘中にやるなんて器用な真似なんて……」

起き上がり土陽は頬をかきながらそう呟く。

「器用じゃねえとかどの口が言いやがる?お前、覇黒をあれだけ振り回せるくせに、弓の技術も高いじゃねえか。って言うか、弓なんてまさに敵の隙を突く道具だろ?」

俺はそう言って、その場に腰を下ろし胡座をかく。

「そうは言ってもねえ……。めんどくせえし……。」

士陽はぽつりと呟く。

この野郎……本音が出やがった。

「その怠惰さがお前のダメな所だ。いつも言っているだろうが、馬鹿者が！」

陳珪様はそう言って士陽にゲンコツをみまう。

うわぁ……痛そう……。

「一刀、お前の腕は確かに良いが、私からすればまだまだ甘い。今後も己の研鑽^{けんさん}を忘れるなよ？」

「御意」

こちらに向き直った陳珪様からそう言われた。

まあ、俺としてもこの程度のレベルで満足してる訳じゃない。

もっと上へ。

そして、いつかじいちゃんを超える。

俺はあらためて心にそう誓った。

side out

side 陳珪

一刀が我が家に居候して、早いようで三ヶ月が過ぎた。

一緒に暮らしてきてわかったが、一刀はまだ人を斬ったことがないらしい。

しかし、一刀の目標を聞いて、私はそれではマズイとすぐに思った。

当時一心様は、仕方ないとはいえ、数多くの人を斬っている。

賊討伐、そして戦。

あの人は、罪のない民達が賊や戦に巻き込まれるのを良しとしない人だった。

だから戦った。

義遠様が統治すれば、きっと民達は幸せになれる。

そう信じ、一刻も早く戦いを終わらせるため、義遠様の敵となる者は容赦なく斬っていった。

もし、一刀が一様を超えようとするならば、一様と同じような志の下、人を斬らねばならない。

でなければ、一様を超えるなど不可能だ。

一様と同様に、一刀が天に帰るのかどうかはわからないが、少なくとも当分の間はこの世界で生きるだろう。

その間、私は一刀を少々鍛えようと思っている。

それが、一様の恩に報いることだと思うから。

故に、私は一刀にこの世界の武人の在り方を教える。

言い方は悪いが、己のために人を斬れなければ、武人としてはやっていけない。

まずは戦場に出て、一刀に人を斬る経験をさせねばならぬな。

そんなことを思いながら、私は部屋で政務を行っていると、気になる情報を記した報告書が目にとまった。

漁陽郡の方で、黄巾賊が増えてきたらしい。

……これだ。

恐らく、近い内に軍を編成し討伐に向かうだろう。

その討伐隊に一刀も加える。

初陣なので、萎縮して戦えぬかもしれんが、土陽の補佐役としてならば大丈夫だろう。

土陽は馬鹿だが、愚か者ではない。

もし一刀に何かあっても、土陽ならば対処出来るはずだ。

そうと決まれば、早速義遠様に相談しなければ。

私は報告書を机に置くと、義遠様の部屋へ向かった。

「なるほど……。確かに貴公の言う通りだ。」

義遠様の部屋に着くなり、私は早速先程の考えを伝えた。

義遠様は納得したように頷いている。

「一心を超える……。か。随分と難しいことを目標にしているな……。」

義遠様は顔をしかめながらそう呟いた。

「私もそう思いました。ですが、一刀は本気でしような。私にその話をした時の一刀の顔は本気でした。」
そう、あの時の一刀の目は本気だった。

意思の籠ったあの目は、まさに一心様のようで、私自身、少々たじろいだのを覚えている。

「ふむ……ならば致し方ないか……。権陽、賊討伐の軍の編成、及びその指揮権を貴公に与える。今日より一週間後、軍を率いて出陣せよ。」

「御意。」

私は一礼して義遠様の部屋から出た。

急ぎ過ぎだな、私は。

実際、私は一刀のためというより、一心様から与えられた恩を早く返したいだけなのかもしれん……。

そうだとしたら、私は最低だな。

我がことながら、情けない……。

そう思いながら、微かに苦笑する。

さて、一刀と土陽をどう配置しよう……。

美玲に相談してみるか……。

そう決めた私は、妻のいる部屋へと足を運んだ。

side 盧植

権陽から話を聞き、私も正直悩んでいた。

もちろん一刀のことである。

「なあ……まだ一刀には早過ぎないか？あの子は一心様とは違うのだぞ？」

一心様は出会った頃、すでに人を斬った経験をお持ちだった。

だが、一刀は違う。

一刀から聞いた話では、一刀のいた世界は平和だったそうだ。

故に、人を斬る覚悟も必要ない。

だが、この世界は違う。

恐らく、そう遠くない未来、大きな戦が始まるだろう。

そんな時、覚悟のない者は真っ先に殺られる。

だから、権陽が一刀にその覚悟をつけさせたい気持ちもわかる。

だが、それは急いでつけさせるものではない。

我が弟子、公孫賛と劉備には一年かけてその覚悟をつけさせた。

我が息子においては、二年以上も時間をかけた。

人を斬る覚悟を急につけさせようとすれば、その前に心が壊れてしまふ恐れがあるからだ。

「わかつている。私が一刀に無茶なことをさせようとしているくらいな。だが、一刀は一心様を超えと言った。故に、近い内に起こるであろう大きな戦にも参加するだろう。しかしその時、その覚悟がないまま参加すれば、一刀は死ぬ。私はそんなことにはなつて欲しくない。だから、出来るだけ早くその覚悟をつけさせたいのだ。」

権陽が顔を歪める。

どうせお前のことだ。

自分のせいで一刀を壊してしまうとも思っているのだろう。

あの子が壊れるかどうかは、あの子次第だというのにな。

「……もうお前の中で、一刀を賊討伐に出すことは決定事項なんだろう？なら、どう配置するか考えよう。」

「……いつも済まないな。」

「はあ……」

おもわず溜息が漏れる。

まったく……お前はいつもそうだな？

何でもかんでも自分が悪いと思い込む。

そのくせ、自分がこうだと決めたことならば意地でもやめない。

まあ、だから私はお前から離れられないんだがな…。

幼い頃、私達は結婚の意味も知らないまま婚約した。

その後、互いに成長し、恋仲にはなったが、私は結婚を諦めていた。

当時の私は、幼い頃の約束など、歳を取るにつれ忘れてしまっただろうと思っていた。

だが、コイツは周りの反対すらも無視して、それを実現させた。

何故と聞いたら、そう決めていたから、とあっけらかんと言ったな。

まさか覚えているとは思ってなかったから、極秘裏だったとしても、涙が出る程幸せだった。

そして二年前、囚人車に乗る私を助けるため、賊に見せかけ護衛隊を襲撃し、私を取り戻してみせた。

自分の立場も弁えず、こんな大それたことをして、バレたらどうするつもりだ、と私は怒ったが、それでも、そう決めたから、と言っ

て笑っただけだった。

正直、嬉しかった。

なりふり構わず、私のためだけに行動してくれた。

女として、これほど嬉しいことはない。

故に、私は決めたのだ。

権陽のためだけに生きると。

そして私は真名以外全て捨て、権陽と暮らしている。

今は幸せだ。

それは自信を持って言える。

でも、たまに見せる権陽の辛そうな顔には胸を締め付けられる思いだ。

そして今も、権陽は目の前で辛そうな顔をしている。

……なあ、権陽？

私はお前を愛しているし、どんな時でも味方であるつもりだ。

もちろん、一刀は大事だ。

わずか三ヶ月だが、私は一刀を本当の息子のように思ってる。

だけどな、一刀以上に、私は権陽、お前が大事なんだ。
だからそんなに思い詰めないでくれ。

そう思いながら、私は権陽と共に軍の編成を考え始めた。

s i d e o u t

s i d e 一刀

今、俺は猛烈に緊張している。

一週間前、俺は陶謙様に呼ばれ、賊討伐に参加するよう指示された。
賊討伐をすること自体に異論はない。

賊達には気の毒だが、略奪行為をしてしまった段階で、討伐される
べきだと俺も思う。

だが、問題は俺が初陣であるということだ。

俺は人を斬ったことがない。

俺のいた世界では、人を斬ることは犯罪だし、そもそも斬る必要がない程平和だった。

でも、この世界は違う。

この世界を知って、陶謙様や陳珪様の手伝いをする決めた段階で、いつか人を斬る日が来ることはわかっていた。

でも、いざこの問題に直面して、こうも恐怖でいっぱいになるとは思ってたなあ……。

「一刀、大丈夫か？」

俺の隣で馬に乗る土陽が心配そうにしている。

「大丈夫だ……と言いたい所だけど、結構緊張してるよ。」

我がことながら情けない。

そう思いながら、俺は苦笑した。

「まあ、お前は初陣なんだし、しょうがないさ。武人なら誰しも通る道だからな。」

土陽はそう言って、いつものように笑う。

「悪いな。まあ、とりあえず頑張るさ。」

「ハハッ、その息だ。いつも通りやれば大丈夫さ。お前の腕なら、賊程度に遅れを取ることなんてないからな。」

士陽はそう言つて前を向いた。

敵はわずか2000程度。

対する俺達は6000の兵を連れている。

確かにこの差を考えれば、なんら心配することなんてない。

ただ……俺に人が斬れるだろうか……？

足手まといにならなきゃ良いが……。

それから一刻程経った時、陳珪様から全軍停止の指示が出た。

俺達は馬を降りると、事前に指示された配置につく。

「一刀、そろそろ来るぜ。」

隣にいる士陽が真剣な顔でそう言った。

来るか……。

俺の心臓は張り裂けそうなほど鳴っている。

その時、遠くから賊のものと思わしき雄叫びが聞こえた。

それと同時に、先遣隊がこちらに帰還する。

どうやら、作戦の第一段階は成功のようだ。

作戦の内容は至ってシンプルで、本隊はU字型の陣形を取り茂みに隠れ、先遣隊が賊達をU字の中心まで引き付け、賊達が釣られた所を一気に飛び出し撃退する。

シンプルだが、タイミングが重要な作戦だ。

とりあえず、その第一段階は終了した。

後は陳珪様の合図を待つのみだ。

……来たっ！

賊達は何も考えていないのか、先遣隊を追っている。

「全軍、突撃！」

陳珪様の合図が出た。

「よし、俺達も行くぞ！」

「「「おおっ！」「」」

周りの兵達が雄叫びを上げ、走り出す土陽に着いていく。

俺は心に靄^{もや}を残しながら、急いで土陽の後を追った。

「はあ……はあ……はあ……」

俺は今、一人の賊と対峙している。

賊はどう見ても素人で、いつもなら一瞬で片が付くような相手だ。

だが、俺はそんな素人に苦戦していた。

周りは血の匂いと悲鳴で溢れている。

これが戦場。

俺は完全にこの雰囲気^{きふき}に吞まれていた。

極度の緊張で手足は震え、まともに刀も振るえない。

「おおおっ！」

雄叫びを上げ賊が突っ込んで来る。

頭が真っ白な俺は、ただ振るわれる剣を受け止めることしか出来ない

い。

その時、突然賊の頭に矢が刺さった。

「ひっ！」

俺はおもわずのけ反る。

「一刀！大丈夫か！？」

声がした方へ振り向くと、土陽が弓を構えていた。

正直、土陽は凄い。

近くの敵は覇黒で斬り裂き、遠くの敵は背負った弓で撃ち抜く。

普段の土陽からは感じられない鋭さがあった。

それに比べて俺は……情けない。

悔しさを胸に秘め、とりあえず土陽に声をかける。

「すまん！大丈夫だ！っ！」

俺は気付いた。

土陽の後ろから迫る一人の賊を。

土陽は……気付いてない！？

ヤバイ！

アイツが殺られる！

……そんなこと……させてたまるか！

俺は蛇歩で賊に急接近し、そして……

「ぐあっ！」

返り血が胴着に飛ぶ。

斬った。

とうとう斬ってしまった。

人を、この手で……。

俺は呆然と倒れた賊を見つめていた。

side out

side 陳登

油断した。

まさか後ろから来るとは……。

「一刀、助かつ……」

一刀の表情を見て、俺は言葉を失った。

呆然と倒れた賊を見るその目に写るもの……それは恐怖。

そうだ、コイツは今日が初陣だ！

そして、今、初めて人を斬ったんだ！

「……一刀、下がれ。戦いはもうじき終わる。ここは俺達だけで大丈夫だ。」

「……済まない。」

ぼつりと呟き、足早に本陣に戻る一刀を見て、俺は自分に対して怒りが沸いた。

当初、俺は徐々に戦場に慣れてもらおうと思っていた。

急に慣れるなんて無理だろうし、俺もそこまで期待していない。

それは、俺も初めての時はそうだったから。

二年間、親父やお袋に着いていき、戦場を知り、そして人を斬る覚

悟をつけた。

一刀もそうすれば壊れずに済む、そう思っていた。

だけど結果はどうだ？

戦場で警戒を怠り、賊だからと慢心した。

……何をしているんだ、俺は！？

これでは一刀が壊れてしまつかもしれないじゃないか！？

「畜生……畜生おお！」

俺は怒りを賊にぶつけるように、覇黒を振り回した。

それから半刻後、無事討伐は終わり、俺達は城へ帰還した。

途中、一刀の様子を見るが、俯いていてよくわからなかった。

城に着くと、一刀は親父に呼ばれ、連れていかれた。

どうしよう……。

もし、一刀が壊れてしまったら、俺は……！？

そんなことを思いながら、俺はお袋の部屋へ帰還報告に来た。

「お帰り。無事終わったようで……どうした？」

俺が俯いていることに気が付いたのか、お袋は心配そうに声をかけた。

「俺……俺……っ！」

悔しさが頬を伝う。

「……何かあったんだな？私に言ってみろ。」

お袋の言葉に頷き、俺は今日あったことを話し始めた。

side 盧植

士陽の話を聞いて、だいたいのことはわかった。

それにしても……本当によく似た父子だ。

確かに戦場で油断したことは武人としてあってはならぬことであり、猛省すべきだろう。

だが、それと一刀の問題は別物だ。

それは一刀の問題であって、土陽に責任はない。

だが、コイツも自分が悪いとも思っているのだろう。

「俺……一刀に助けられて……でも……そんなことを今日させるつもりはなくて……」

よほど悔しかったのだろうか。

先程から泣きながら土陽は語っている。

私はそんな土陽を優しく抱きしめた。

「今は権陽が一刀と話をしているのだろうか？ならば大丈夫だ。お前の父を信じる。」

そう言って優しく土陽の頭を撫でる。

まあ、一刀は権陽に任せるとして、問題は土陽だ。

今、コイツは激しい自己嫌悪に苛さいまれているだろう。

「それより土陽、お前は今日の自分をどう感じた？」

私は腕の中にいる土陽に尋ねる。

「……情けねえ。俺は大馬鹿野郎だ。武人としても大馬鹿だし、一刀の友としても大馬鹿だ。」

土陽は拳を握りしめ、そう呟く。

まあ、わかつてはいるようだな。

「で、お前はこれからどうしたいのだ？……わかっているのだろうか？」

「俺は……天下に名を轟かす武人にならなかつていい。だけど……友の足を引っ張るような情けねえマネはもう二度としねえ。だから、必ず強くなる。人が気軽に助けを求めてくれるような、そんな男にいつかなつてやる。」

私から離れた土陽は真剣な顔でそう言った。

「お前ならなれるさ。お前は私と権陽の息子だぞ？ やつてやれないことなど、あるはずがない。」

息子の成長に喜びを感じながら、私は窓の外に目を向ける。

今日は満月だな……。

後は……一刀だけだ。

権陽、頼んだぞ？

s i d e o u t

s i d e 陳珪

先程、一刀を私の部屋へ連れてきたが、一言も喋らない。
よほど精神的に参っているのだろう。

まさか最悪の状況になるとはな。

これも私の見通しの甘さが招いた結果か…。

だが、起こってしまったことは仕方がない。

何とかしてみせよう……。

「さて、一刀。お前は何故私に呼ばれたかわかるか？」

「俺が……いつまでも情けないから……。」

俯きながら一刀はそう呟いた。

ふむ……これは重傷だな。

「一刀、少し昔話をしよう。」

一刀は意外そうな表情でこちらへ向き直る。

まあ、それはそうか。

この場面で昔話などと言われればそういう顔にもなるな。

「若い頃、お前と同じように、どうすれば人の死に慣れることが出来るのか、という疑問を私も持ったことがある。」

「陳珪様が……？」

一刀は意外そうな顔をしている。

……さては、何か大きな誤解があるようだな。

「一刀、お前もしや、この世界の人間は、初めから人を殺すことに慣れていると勘違いしてないか？」

「違うのですか？戦の絶えない時代ならば、ある程度慣れているものなのでは？」

驚いた一刀の顔を見て、私は一刀が大きな勘違いをしていることを確信する。

「馬鹿なことを言うな。初めから慣れているわけないだろう。皆、少しずつ戦場を経験し、少しずつ折り合いをつけながら戦っている

のだ。お前の場合、それが急過ぎただけだ。……まあ、その点について、申し訳なかったと思っている。済まない……。」

「そんな！？顔を上げてください！全ては未熟な俺が悪いのです。」

「ふむ…一刀、昔話の続きだが……私が戦場で人を斬ることに躊躇^{ためら}いを持たなくなったのはな、一心様のおかげなのだ。」

「じいちゃんが！？」

だいぶ驚いてるようだ。

いつもなら、我が師と呼んでいるのにな。

まあ、それだけ余裕がないということか……。

「左様。若い頃の私は一心様に聞いたのだ。どうすれば、人を斬ることに慣れるのか……と。」

思い返せば、あの時は私も今の一刀の様だったな。

一心様の言葉がなければ、私はどうなっていたのか……。

「それで……じいちゃんは何て？」

一刀は答えを急かすように身を乗り出した。

「一心様は苦笑しながら言っていた。『私は人を斬ることに慣れたと感じたことは一度もない。』とね。」

「えっ？」

一刀が間抜けた表情をする。

まあ、そういう反応をするだろうと思っていたよ。

私も同じ反応をしたからな。

「一刀、まず覚えておいて欲しいのは、あの一心様でさえ、人を斬ることに慣れたことはないのだよ。では、一心様は何故あれ程の武勇を戦場で誇ったのか？その答えが、今の武人としての私の原点であり、全てでもある。」

そう、あの時の一心様の言葉が、今の私を創ったのだ。

「……………」

一刀は黙って私の話を聞いている。

先程の沈みきった表情ではない。

どうやら……一刀の中で答えがまとまりつつあるようだな。

ならば後一押しか…？

「一刀、例えどんなに正義だなんだと言い繕っても、人を斬ることに正当性などない。それが賊であつたとしてもだ。何故だかわかるか？」

一刀は考えるそぶりを見せるが、しばらくして首を横に振る。

「答えは簡単だ。それは自己満足でしかないからなのだ。正義や理想のためと言う者は、己の正義や理想を守るために人を斬る。困っている人を守るためと言う者は、困っている人を見たくないから人を斬る。結局は全て自分のため。故に、そこに正当性などありはない。いや、むしろあつてはならぬ。どんな理由にせよ、己の意思で斬ったのだからな。ここまでは良いか？」

一刀は静かに頷く。

その目には力が戻っているし、もう大丈夫だろうが、私はどうしても一心様の言葉を一刀に聞かせてやりたい。

「だからこそ、一度人を斬ったならば、二度と躊躇ってはならぬのだ。躊躇うということは、今まで己の自己満足のために斬っていた相手を冒流しているのと同義だ。一心様が強い理由は、もちろん高い技術があつたこともあるが、それを知っていたからだ。一心様は斬ることに慣れていたのではなく、斬った相手に恥じぬよう、躊躇いを捨てていた。だからあれ程の武勇を誇ったのだ。」

当時一心様が私にこの話をされた時、私は一心様が強い理由を驚くほど素直に理解出来た。

そして、それが私にとって大きな転機だったのだ。

本当に……一心様には感謝してもしきれない。

「でも……俺には一つだけわからないことがあります。」

「ほう……何だ？」

「自分が斬った相手に対する罪悪感が、どうしても拭えないのです。その人が生きた人生を俺の手で奪ってしまった。それが堪らなく申し訳なくて、どうすれば償えるのか……わからないのです。」

一刀は悔しそうに手を握りしめている。

なるほど、一刀の考えはだいたいわかった。

まあ、気持ちはわからんでもないが、その答えは一つしかない。

「一刀、それは無理だ。」

「えっ…?」

一刀は啞然とした表情になる。

「確かに、お前の気持ちはわかる。優しいお前のことだ、それが堪らなく辛いのだろう? だがな、斬った者が具体的に何かを償うなど、出来はしないのだよ。先程も言っただろう? どんな理由があろうとも、己の意思で斬ったのだ。だからこそ、己が斬った者に恥じぬように生きねばならぬ。斬られた者が黄泉で、あんな奴に斬られたのか、と思うような無様を晒してはならぬのだ。それが、人を斬った者に出来る唯一のことだ。」

「己が斬った者に、恥じぬ生き方……」

「そうだ。そして、お前が感じた罪悪感、それは一生拭われることはないだろう。だが、それは武人の運命だ。さためむしろ、武人はそれを背負って生きていかなばならない。だから武人と呼ばれる者は皆氣

高く見えるのだ。良いか、一刀。真の武人とは、ただ技術が高いだけではない。高い志と、斬った相手に恥じぬ気高き生き様が、周りの者に真の武人と呼ばせるのだ。」

これこそ、私が一心様に教わったこと。

今の私の出発点。

「一刀、今日、お前は人を何故斬った？」

「それは……土陽が殺られそうになって……俺はそれが嫌で必死になって……」

「なるほど。ならば、お前はそれを後悔しているか？」

「それはありません。あそこで俺が斬らなければ、土陽を失う所でしたから。」

力強く一刀はそう言った。

うむ、ちゃんとわかっているようだな。

「今日のお前はそうのように明確な目的を持って人を斬った。それで良いのだ。これは一心様も言っていたことだが、人を斬る時は、明確な意思を持って斬れ。意思なき剣は、ただの殺人だ。このことを、生涯忘れないで欲しい。」

私は一刀の目を見てそう言う。

一刀の様子を見るに、私が言いたいことは伝わったようだ。

「陳珪様……ありがとうございます。貴方から教わったことを忘れず、これからも弛^{たゆ}まぬ努力をしていきます。」

その眼に覇気をたぎらせ、覚悟を決めた一刀のその顔は、まさしく私^が知る北郷 一心そのものだった。

もう大丈夫だな。

ああ、その前に一つだけ言い忘れたことがあった。

「一刀、最後に一つだけ言わせてくれ。私の大事な息子を、土陽を救^すってくれて、本当にありがとうございます。」

そう言っ^て私は一刀に頭を下げた。

s i d e o u t

s i d e 一刀

陳珪様の部屋を出た後、俺は城の城壁の上に登り、城下の町を眺め

ていた。

月明かりに照らされた夜の町はとても美しく、俺はここから見える景色が大好きだ。

「ふう……」

溜息が漏れる。

俺は陳珪様に言われたことを思い返す。

己が斬った相手に恥じぬ生き様。

言葉で言うだけなら簡単だが、実践するとなれば、相当難しい。

だけど、これで一つハッキリしたことがある。

何故、じいちゃんや陳珪様があれほど気高く見えるのか。

二人とも、人を斬ることに慣れた訳じゃなくて、斬った相手に恥じぬように生きているから気高く見えるんだ。

俺は……あの二人のようになれるだろうか？

いや、なれるかではなく、なるんだ。

俺の目標は、じいちゃんを超え、じいちゃんが誇れる侍になること。

その道を歩む過程で、沢山の人を斬るだろう。

確かに、今でも人は斬りたくない。

だが、俺はもう斬ってしまった。

後戻りは出来ないし、するつもりもない。

これから、いよいよ本格的に三国時代が始まる。

沢山の英雄達が現れるこの時代で、未熟な俺がどこまで通用するのかはわからない。

けど、俺は負ける気も、死ぬ気もない。

誰よりも強く、誰よりも気高く。

そうでなければ、じいちゃんを超えるなど不可能だ。

もういい加減、甘い自分から生まれ変わろう。

今日から、本当の意味で俺の人生は始まる。

北郷御影流剣術継承者、北郷 一刀の第一歩目。

俺は腰に下げた千代桜を抜き、煌々と光る満月にその刃を向ける。

「じいちゃん、そして先祖の方々、俺はここに誓います。貴方達が誇れる侍に、必ずなってみせると。だから、それまで見守っていてください。」

俺は月光に照らされキラキラ光る刀身を見ながら、誰もいない城壁

の上で覚悟を決めたのだった。

く第三話く侍、命の重さを知る（後書き）

今回は難産でした。

命の重さ云々の話はやっぱり難しいですね（ーωー；）

そして、盧植先生はこういう設定にさせてもらいました。

これはご都合主義になってしまっんでしょうか？

まあ、そうだと言われても今更直せませんがねwwwwww

では、次回をお楽しみに！

く第四話く侍、旅立ちの時（前書き）

遅れました！

とりあえず、どうぞ！

く第四話く侍、旅立ちの時

side 一刀

「寒すぎる……。」

隣を歩く土陽がポツリと呟く。

「言うな。俺は今、考えないようにしてるんだ。」

俺は寒さを忘れるため、わざと何も考えないようにしているが、所詮は無駄なことである。

时期的にはもう年末で、雪の積もる外での兵の調練はまさに地獄だ。さつさと部屋に戻って暖を取りたい所だが、生憎この後に城門の警備があるのでそれも出来ない。

権陽様の方針で、俺達を特別扱いはしないそうだ。

故に、城門の警備、町や城の警邏、馬小屋や武器庫の掃除、等など一般兵と同じことを俺達も順番でやらされる。

身内鼻屑しないっていう方針には賛成だし、権陽様の考えもよくわかる。

だが、これだけ寒ければ文句の一つも言いたくなるのは自然なことだろう。

まあ、だからといって何かが変わるわけではないのだが……。

俺はそんなことを思いながら、城門の二階に備え付けられた警備室にいる二人の兵士に声をかけた。

「お疲れ様です。交代の時間ですよ？」

「おお！ やつとか！ 今のところ異常はないぜ？ じゃ、後は頼んだよ。」

「お疲れ様〜。」

そう言つて、二人は足早に戻つて行つた。

「ほら、土陽！ やるぞ？ お前そっちの窓だろ？」

二つある窓のうち一つの前に立つよう土陽を促し、俺は残つた一つの前に立つた。

窓と言っても、風を防ぐガラスの扉なんてない。故に、風が思いつ切り入ってくるので猛烈に寒い。

今、この場にある寒さを凌ぐ道具は毛布のみで、正直ここでの仕事は一番キツイ。

隣にいる土陽はすでに毛布に包まり、全く喋らない。

本人曰く、少しでも体力を回復するためだそうだ。

果たしてそれで体力が回復するかどうかは甚だ疑問だが、言っても無駄なのでとりあえずほって置く。

俺は城門の窓の外に広がる荒野を眺めながら、物思いに耽^{ふけ}た。

あの初陣から早いことでもう一年が過ぎた。

この一年間、俺は本当に色々なことを学んだ。

文字の読み書きがある程度出来るようになった俺は、義遠様や権陽様の政務を手伝い始めた。

ちなみに、二人の真名は俺の16歳の誕生日に教えてもらった。

政務の手伝いをするうちに、最近は政治というものもある程度理解してきた。

おかげで、今の世の中の政治がどれだけ腐敗しているのがよくわかったよ。

最初は、ここまで汚職で溢れてるのに、何で誰も摘発したりしないんだと思っていたけど、よく考えたら中央が腐ってる段階で摘発する場所なんてすでにないことに気が付いた。

本当、世も末とはまさにこのことである。

こんな有様じゃ、そりゃあ賊も増えるよなあ…。

だけど、その賊もほって置くことは出来ない。

いくら政治が乱れたからといっても、善良な民から略奪して良い理由にはならないからだ。

故に、賊討伐も引き続き行っていて、俺もそれに参加している。

やはり人を斬ることには慣れないが、それでも躊躇いは捨てたつもりだし、少なくとも初陣の時のように戦場で震えることはなくなった。

これでまた一歩じいちゃんに近付けたなら、不謹慎だけど嬉しい。

義遠様曰く、俺は将来的に兵を率いる將軍になってもらいたいらしい。

俺にそんな器があるかどうかはわからないが、いざなった時、何も出来ないと困るので、半年前から美玲様に兵法や軍務に関することを教わっている。

流石美玲様と言うべきか、俺みたいな凡人でもわかりやすく教えてくれる。

おかげで、最近は戦場でも敵の動きが読めるようになったし、俺のいる部隊でも独自の策を提案できるまでになった。

まあ、じいちゃんを超えるなら、いつか自分の隊を率いて活躍したいなあ…。

超えるべき壁はまだまだ高いけど、こうやって日々積み重ねていけば、いつか届くはずだ。

そのためにも、もっと鍛錬を積んで、強い奴と戦って、自分を高め
ていこう。

じいちゃんにも言われたらどう？

俺はまだまだこれからなのだ。

真の侍に、いつかなるために……もっともつと上へ。

そんなことを考えながら、俺は警備を続けた。

五日後、俺は義遠様の政務を手伝いながら、気になる報告書を見つ
けた。

「あの……義遠様？聞きたいことがあるのですが、よろしいですか
？」

「む？何だ？申してみよ。」

義遠様はその手の報告書から目を俺に移す。

「この報告書にある陶商様とは……義遠様のご子息の方ですか？」

「おお！義雄きゆうのことか！そういえば、まだ貴公には紹介していなか

ったな？」

義遠様はそう言って、嬉しそうに語りだした。

名は陶商 字は示葉^{じよう}。

義遠様の一人息子だそうだ。

気遣いが良く、状況判断能力に優れていて、頭も良いため、今は徐州の刺史として働いている。

それを聞いて、俺は少々疑問を感じた。

俺の記憶が正しければ、正史の陶商ともう一人の息子、陶応は出来が悪かった。

だから陶謙は、徐州を自分の息子には渡さず、劉備に渡そうとしたはずである。

俺はてっきり、遠くない未来に、義遠様が黄巾賊の討伐のため、徐州刺史に任命されるとばかり思っていた。

そう思っていたからこそ、徐州については何も調べなかった。

ところが、実際の陶商さんは優秀で、義遠様の代わりに徐州刺史になっている。

そして、驚いたことに陶商さんは幼い時にじいちゃんと会ったことがあるらしい。

義遠様曰く、陶商さんはじいちゃんに良く懐いていたらしく、じいちゃんから色々教わっていたようだ。

これらをふまえて、俺は一つの仮説を建てた。

この世界は、ただ単に俺達がいた世界の過去というわけではなく、全く別次元の世界、世間的に言うパラレルワールドなのではないだろうか？

そして、今いる世界はじいちゃんの介入によって、本来の歴史とは変わった未来になったのだ。

ということは、俺の持つ三国志の知識はあまり当てにならない可能性がある。

困ったな……。

実はこの状況、ヤバイんじゃないか？

「一刀、聞いておるか？」

「っ!？」

義遠様の声で我に返る。

「大丈夫か？お前は良く頑張っているからな。疲れが溜まっているのではないか？」

義遠様は俺に心配そうに声をかけた。

「いえ、大丈夫です。すみません、自分で聞いておきながら、ぼつとするなど……」

いかな……。

深く考え込み過ぎて周りが見えなくなるのは俺の悪い癖だ。

「大丈夫なら良いのだが……。ああ、そういえば私の孫も紹介していなかったな。ついでだから紹介しておこう。」

「お孫さん……ですか？」

「うむ。名は陶応^{とつおう}、字は幹路^{かんじ}。コイツは本当に優秀でな。恐らく、歴代陶家の中で一番頭が切れるだろう。」

ちょっと誇らしげに言う義遠様の姿から、本当に優秀なんだということがわかる。

つて言うか、陶応が孫！？

確か陶応って陶謙の息子だったよな？

……やっぱり少しずつ俺の知ってる三国志とズレてる……。

「そうなんですか……。」

うーん……訳がわからん。

……まあ、良い。

とりあえずゴチャゴチャ考えるのは後だ。

俺はそう思いながら、今は義遠様の手伝いを優先した。

義遠様の手伝いを終えた後、俺は権陽様の家の自室で義遠様の話について考えていた。

陶商が徐州の刺史だったこと。

陶応が義遠様の孫という立場だったこと。

この二つだけでも十分おかしい。

もし、昼間俺が建てた仮説が正しいのだとしたら、同じ三国志の世界でも、全く違う結末を辿るかもしれない。

何がどう転がるかわからないことが、こんなに恐ろしいことだななんて思いもしなかった。

「俺は……これからどうすれば良いんだ……？」

おもわず呟いてみたが、その答えは出るはずもない。

勿論じいちゃんを超えろという目標を変えるつもりはない。

でも、それだけで良いのだろうか？

この一年間、俺は確かにこの世界で生きていた。

様々な人の手を借り、様々な人の優しさを受け取り生きていた。

俺は……彼らに恩を返したい。

でも、どうすれば良い？

それは、歴史を変えてまですべきことなのか？

そもそも、歴史を変えても良いのか？

グルグルと頭の中で自問自答するが、一向に答えは出ない。

ふと千代桜を見つめる。

じいちゃんはどうのように考えていたのだろうか？

俺と同じようにこの世界に来て、何を思い、何を成すため剣を振ったのか？

「あああつ！わかんねえ！」

おもわず叫んでしまう。

その時、部屋の扉の外から声がした。

「一刀、今入っても良いか？」

土陽？

どうしたのだろう？

夕食はまだのはずだし……。

「ああ、良いぜ。」

俺はそう言つて扉を開けると、そこにはお茶とお菓子を持った土陽がいた。

「よう！ちよつと良いもん貰つたんだ。一緒に食おうぜ！」

土陽はそう言つて、ズカズカと部屋に入ってくると、机にお茶とお菓子を置いて椅子に座つた。

「お前……夕食前に良いのかよ？美玲様に怒られるぞ？」

「良いの良いの！それより大事なことがあるからな。」

「大事なこと？」

腰掛けた椅子に深く座りながらニツコリと笑う土陽に、俺は訝しげな表情を浮かべる。

「お前……最近どうした？」

「えっ？」

「特に今日なんか、随分と悩んでたみたいじゃねえか。」

「っ!？」

驚いた……。

バレてたのか？

「何でわかった？」

「お前な……周りに人がいるのに、それさえ気付かずあれだけ考え込んでる姿を見りゃ、普通気付くわ。」

呆れた表情で士陽が皿のお菓子を摘む。

「それにな、親父やお袋、義遠様まで心配してたぞ?。」

「義遠様達まで!？」

マジか……。

皆に心配をかけてたなんて……。

「で、一体どうしたんだ?。」

士陽が真剣な表情を向けてくる。

「……………」

話しても良いのだろうか？

未来から来たこと。

この時代に誰がどんなことをするのか知っていること。

だけど、俺の知ってる歴史と変わってしまったこと。

普通こんな話、誰が信じる？

「言えないか……？」

俺の前に座る土陽の目が俺を見透かすように感じる。

言いたい。

言ってしまいたい！

言って、話をして、俺がどうすべきか教えて欲しい！

けど……拒絶されるかもしれない。

俺はそれが怖いのだ。

「なあ、一刀……。俺はよ、お前の親友であるつもりだ。だけど俺はお前じゃねえから、お前が何で悩んでいるのかはわからねえし、具体的に力になれるかどうかもわからねえ。」

力強い土陽の視線に、俺はただ黙って話を聞く。

「けどな、お前が悩んでる時、話くらいなら聞いてやれる。俺はお前がどんな話をしようと馬鹿にする気はねえし、お前がくだらねえ

嘘をつく奴じゃねえのも知ってる。だから、話してみろよ、親友。」

本当に……俺はこの世界に来て良かった。

士陽なら大丈夫だ。

話してみよう。

何たって、コイツは俺の親友なのだから……。

s i d e o u t

s i d e 陳登

「なるほどねえ……。」

一刀の話を聞き終えた俺は、感慨深くそう呟いた。

まあ、確かにこんな話は言えねえよな。

下手したら、頭のおかしい奴だと思われるし……。

でも、多分一刀は嘘をついていない。

コイツの目を見ればわかる。

これは嘘をついてる奴の目じゃない。

それに、真面目なコイツがこんな無駄な嘘をつくはずがない。

それにしても……まさか一刀が未来人だったとはねえ……。

まあ、流星に乗ってきた段階で、この世界の住人ではないと思ってただけだな。

「信じられないだろ？自分で言ってもおかしい話だと思うしな……。」

自嘲気味に一刀は苦笑する。

確かに、にわかには信じられねえ話だろうな。

ただどな？

「いや、俺は信じるぜ。」

「えっ？いや、でも……」

「でもじゃねえよ。信じるって言ったんだ。嘘じゃねえんだろ？」

「ああ……。」

俺は一刀の話を信じる。

どっちにしろ、疑った所で得る物なんて、何もねえからな。

「で、結局お前は何に悩んでるわけ？」

一刀の話でイマイチよくわからん所が、ここ。

今の話で、悩まなきゃいけない所なんてあったか？

「俺は……何をすべきか、わからなくなつたんだ……。」

沈んだ表情で一刀がそう呟く。

「じいちゃんを超えたい気持ちは今も変わらない。でも、それだけじゃダメだと思ってる自分もいるんだ……。俺は……この世界で世話になった人に恩返しをしたい。少なくとも、世話になった人が悲しい思いをするようなこの時代を、変えたいと思ってる。」

それが本心か。

相変わらず真面目だねえ……。

誰も恩返しなんて求めてないのにさ。

「なら、お前が君主になるなり、この時代を平和に出来そうな君主に仕えるなりすれば良いじゃねえか？」

そう、それだけの話だ。

それだけなのに、何故悩む？

「さつきも行つたろ？俺が動けば、本来在るべきはずだった歴史が変わってしまう。それは俺がこの世界の住人じゃないからだ。もし、俺の知らないことが起きた場合、俺は世話になった人に迷惑をかける可能性がある。迷惑で済めば良いけど、下手したらその人が死んでしまうかもしれない。俺は……それが怖いんだ……。」

一刀は目を伏せそう言った。

ああ、なるほど……。

だいたいわかった。

それがお前の悩みか。

……氣にくわねえな。

「らしくねえな。」

「えっ？」

一刀が驚いた表情でこちらを見る。

「俺は、歴史の流れがどうか、そういう小難しい話はよくわかんねえ。けどな、これだけはわかる。お前は一つ勘違いしてるぞ？」

「勘違い？」

一刀は驚いて目を丸くする。

馬鹿野郎め。

普通気付くだろうが……。

「確かに、未来人のお前にとっては、知っていることと違う結果になりや困るだろうさ。お前のことだ、その知識を使って、ある程度予測して行動するだろうからな。」

「まあ……そうだな。でも、俺のことは別に良いんだ。正直な話、俺の知ってる歴史は、もう当てにならないと思ってる。だから、これからはそれに頼らず、自分で周りを見て生きていかなきゃならない。でも、俺が行動することで、歴史が変わって誰かに迷惑がかかったらと思うと、俺はどうすべきか、わからないんだ……。」

一刀は悔しそうに拳を握る。

「お前……そこまでわかっておきながら、肝心要の部分で勘違いしてんじゃねえよ。お前からしたらこの時代は過去のことかもしれないねえが、俺らにとってはこの時代が今なんだ。」

「っ!？」

一刀は何かに気付いたように息を呑む。

やっと気付いたか、馬鹿野郎め。

「迷惑とかそういう話じゃねえんだよ。俺達は俺達のやり方で今を

生きていく。例えその途中で死んだとしても、それは他でもねえ自分の責任で、お前は関係ないんだ。それとも、お前は誰も犠牲にならないやり方を知ってるのか？」

「……知らない。って言うか、そんな方法あるわけがない。」

わかってるじゃねえか。

まったく……苦労かけさせやがって。

「なら、お前のやりたいようにやれよ。未来が変わる？ハッ、だからどうした。どうせ先のことなんざわからねえんだ。だったら、今自分がやりたいことをやった方が、よっぽど健全だ。そうは思わねえか？」

ニヤリと笑って俺はそう締めくくった。

「お前は……すげえ奴だな。」

そう言って一刀は苦笑する。

「当たり前だ。俺を誰だと思ってやがる？」

盧植と陳珪の息子だぞ？

「ハハッ…そうだな。」

一刀が穏やかな笑みを浮かべる。

もう大丈夫だな。

「まったく……せつかくの茶が冷めちまったぜ。」

俺は苦笑しながらそう呟いた。

それにしても……まさか一刀が時代を変えたいと言い出すとはな…
…。

多分、近い内に一刀は義遠様の城を出る。

一刀の性格から考えて、自ら君主になるのではなく、誰かに仕えるはずだ。

さて……そろそろ俺も身の振り方を考えねえとな……。

そう思いながら、俺は冷めた茶に口をつけた。

s i d e o u t

s i d e 一刀

土陽に全てを話した翌日、俺は権陽様の部屋へ向かっていた。

俺は昨日、ある決意をした。

この時代に生きていく者として、何か出来ることはないか？

自問自答を繰り返し、すごく悩んだけど、最高の親友が答えをくれた。

気付いてしまえば何てことはない。

アイツの言う通りだ。

少なくとも、じいちゃんが来た段階で、すでに歴史は変わっているのだ。

今更、俺が歴史を守ろうとしても無駄なことだし、例え歴史が変わったとしても、それが新しい歴史に刻まれるだけである。

ならば、俺は俺の道を歩むだけ。

ただ単にじいちゃんを超えるだけじゃなく、じいちゃんから受け継いだ北郷御影流剣術が、この世界でも通用するのだということを証明する。

それが俺の新たな目標。

だけど、そのためには天下に名を轟かす武人達と戦わなければならない。

恐らく、彼らと出会う確率が一番高い場所は戦場だろう。

もし俺の目標を達成させるならば、今いるこの場所から出なければならぬ。

これは俺の自己満足だ。

だからこそ、義遠様達を巻き込むわけにはいかない。

恩人である義遠様の治める幽州に、要らぬ戦火を撒き散らすことなどあつてはならないからだ。

とは言え、俺の我が儘が義遠様の迷惑になる可能性もある。

だから、まずは権陽様に相談をしに行く。

権陽様なら、客観的に判断してくれるはずだ。

そんな思いを抱きつつ、俺は権陽様の部屋の前で声をかけた。

「権陽様、一刀です。ご相談したいことがあります故、参りました。」

「一刀か、入れ。」

「失礼します。」

権陽様の返事を聞いた俺は、そう言って扉を開けた。

「権陽様、お忙しい所申し訳ありません。」

「気にせずとも良い。それより、まずは座りなさい。」

権陽様に促され、俺は椅子に座る。

「して、相談したいこととは何だ？お前の悩み事は解決したと土陽が言っておったが……。」

「そちらはもう大丈夫です。ご心配をおかけしました。今日はそのことではなく、別の案件で参りました。」

俺は権陽様をまつすぐ見据えてそう言った。

「……申してみよ。」

「はい、実は……。」

俺は心に抱いた思いを権陽様に伝えた。

権陽様は頷きながら、俺が話し終えるまで、口出しをすることなく聞いていた。

「ふむ……なるほどな。」

権陽様は何故か納得した表情で呟く。

「あの……自分で言うのも何ですが、驚かれないのですか？」

俺がやるうとしていることは、だいぶ突拍子もないことである。

にも関わらず、権陽様は驚かれないとは……。

「まあ、お前の目標を聞いた時から、何となくこうなるだろうとは思っていたからな。さほど予想外なことではない。」

そう言つて、権陽様は穏やかな笑みを浮かべる。

「そうでしたか……。なら、もし俺が今すぐ行動を起こした場合、義遠様に迷惑がかかるでしょうか？」

そう、問題はこれ。

もし義遠様に迷惑がかかるなら、また別の方法を考えなければなら
ない。

「いや、特に義遠様が迷惑を被ることはないだろう。お前は特別な
役職についているわけでもないしな。」

権陽様はそう言つて机にある茶を飲む。

「だが、足りないな。」

「えっ？」

権陽様は茶器を机に置くと、俺に向き直った。

足りない？

一体何が……？

「一心様を超え、天下にお前の剣術が通用することを証明したい気持ちにはわかった。それ自体は悪いことではない。だが、それだけでは足りんのだよ。その様では、ただの腕自慢の野望に過ぎない。お前は一心様を超えるのだろう？ 一心様は常に平和への理想を目指していた。また、そのために剣を振るった。ならば、お前は何を理想とする？」

俺の理想……か。

確かに、そこまで考えてなかったな……。

「そんなに難しく考える必要はないさ。私はお前が世の中に対して直感的にどうしたいのか聞いているだけだからな。」

考え込もうとする俺に、権陽様は苦笑する。

俺がこの世界に対して、直感的に感じること？

それなら……ある。

「俺には、義遠様や権陽様、そして美玲様のように、民を正しい方向へ導くなんて出来ません。ましてや、君主として君臨し、この時代を変える英雄になる器ありません。でも……」

「……でも？」

「それが出来る英雄を支えることなら出来ます。剣しか取り柄のない俺ですけど、この戦乱の世を終わらせ、皆に普通の幸せを手に入れてもらいたいという願いはあるんです。」

俺に国を率いる器はない。

ならば、それが出来る君主に仕え、少しでも手助けが出来れば本望だ。

「それが……お前の理想か。」

「はい。」

真剣な表情で、権陽様と視線を合わす。

俺の気持ちが伝わるよう、俺は決して視線だけははずさない。

「……わかった。そこまで考えているのなら、最早何も言つまり。私から義遠様に話を通しておいてやる。」

「本当ですか!？」

それは助かる。

権陽様からそう言ってもらえるのはラッキーだ。

これなら、幽州を出ることも、義遠様に許してもらえるかもしれない。

「そういえば、お前はこの城を出て、一体誰に仕えるつもりだ?」

「あつ……」

……しまった。

そこまで考えてない……。

「はぁ……。その様子では何も考えていないな？」

「すみません……。」

呆れた表情で権陽様が見つめてくるが、目を見れない。

俺、詰めが甘いなぁ……。

「……まあ、焦る必要はないだろう。とりあえず、莉昂に周辺の諸侯の情報でも聞いてみると良い。」

権陽様はそう言って苦笑した。

「そうします……。」

俺は恥ずかしさに耐えながら、そう呟いた。

s i d e o u t

先日、権陽から一刀の話を聞いた。

まあ、予想通りと言えばそうだが、当初は正直な話、賛同しかねた。

一刀には、ゆくゆく我が軍の將軍になつてもらおうと思つていたからだ。

だが、権陽から詳しく話を聞いて、その考えは無駄だと気付いた。

一刀は一心とよく似た所が多々ある。

その一つが、一度決意したことならば、最後まで貫き通す意思の強さだ。

話を聞く限りでは、恐らくもう決意したことなのだろう。

ならば、止めても無駄だ。

また、莉昂の話では、一刀は劉備の義勇軍へ加わるつもりだそうだ。

どうやら、劉備の理念に共感したらしい。

以前劉備に会った時、確かに人徳を感じた。

だが、彼女は甘すぎる。

優しさだけで通用するほど、他の諸侯は甘くない。

あのままでは、ただ時代の波に揉まれて終わりなのではないだろうか？

一刀は馬鹿ではないし、政治的なことも教えたから、それがわからないはずがない。

にも関わらず、何故劉備を選んだのだ？

……まあ、本人なりの考えがあるのだろう。

一心がそうだったからな。

一心も時たま、私達には考えつかない、突拍子もない行動に出ていた。

だが、それは暴走ではなく、一心の確固とした理念に基づいた行動だった。

故に、最終的にはそれによって状況が良くなっていたし、私も幾度となく助けられた。

恐らく、一刀のそれもそうなのだろう。

……懐かしいものだ。

30年という月日は、私にとってあつという間だったが、一心にとってはどうだったのだろうか。

一心は何を思い、何を願って、一刀に己の剣を教えたのだろうか。
奴が死んだ今となつては、それを聞くすべがないことはわかっているが、私はそう思わずにはいられなかった。

s i d e o u t

s i d e 一刀

権陽様に相談してから一月が経った。

この一月、俺は莉昂さんに貰った資料で色々と調べた。

後漢王朝のこと。

周辺諸侯のこと。

黄巾賊のこと。

そして、後に活躍するであろう、三国の英雄達のこと。

驚いたのは、三国の英雄達が女だったことだ。

これにより、間違いなく俺の世界の過去とは違うと確信した。

まあ、だからといって今更何かが変わるわけではないけどな。

例え女であっても、英雄達の武勇は凄まじいらしい。

とりあえず、俺より強いってことはよくわかった。

また、それぞれの思想も、わかる範囲で調べた。

皆それぞれに野望を持っていたが、俺が本当に仕えたいと思う者はなかなかなかった。

ある一人を除いて……。

その一人こそが、劉備 玄德である。

彼女は大陸に己の覇道を打ち立てるためではなく、ただ民達が笑顔で過ごせる世界を創るため、義勇軍を立ち上げたそうだ。

まさに、俺の理想とする君主の姿だ。

流石、大徳と呼ばれるだけはある。

実際に見てみないとわからないけど、俺は彼女を手伝いたいと直感的に思った。

まあ、確かに甘いと思う部分も多々ある。

彼女は、なるべくは誰とも戦わず、話し合いで解決したいと言っているそうだ。

確かに、この世界が俺のいた世界のように、広く文化的に発展しているならば、それがベストの選択だ。

むしろ、戦争なんて始めようものなら、問答無用で国連からボコボコにされ、その指導者がテロリストとして扱われてしまうだろう。

だが、この世界は違う。

己の理想を叶えたいならば、当然それなりの力を示す必要がある。

しかも、戦わずに話し合いで平和な世を創るなど、出来るはずがない。

故に、他の諸侯からは甘いと言われ、実際俺もそう思う。

だが、時代を変える者は、得てしてそうした異端児だ。

劉備もまた、異端児だろう。

他とは違う考え方をするからこそ、それが時代を切り開く力となる。

事実、少ないまでも劉備に従い、ついていく者もいる。

ならば、俺も彼女の理想のために、剣を振るおう。

それが、俺の理想を叶える一番の近道なのだから。

そう思いながら、俺は劉備についていく旨を、義遠様に伝えに行った。

義遠様に俺の考えを伝えてから一週間後、ついに旅立ちの日となった。

今朝はいつも通り起き、いつも通り美玲様の出す朝食を食べる。

俺、士陽、権陽様、そして美玲様の四人で一緒に食べる朝食が今日で最後だと思うと、少し寂しくなった。

この一年間、二人は俺を本当の息子のように可愛がってくれたし、俺もまた二人を本当の親のように思っていた。

元いた世界では、じいちゃん以外は注いでくれなかった愛情を、二人は俺に注いでくれた。

それが本当に嬉しくて、感謝してもしきれない。

そして士陽は、親友としていつも俺を助けてくれた。

まあ、時には困らされたこともあったけど、それもまた良い思い出だ。

……寂しいけど、お礼を言わないとな。

「権陽様、美玲様、そして土陽、俺はこの一年間、とても幸せでした。教えてもらったことは決して忘れません。本当にありがとうございました。」

俺は感謝の念を込め頭を下げる。

「礼などいらぬ。私はお前を息子のように思っているからな。息子の世話をしただけに過ぎん。」

「権陽の言う通りだ。一刀、帰りたくなったら、いつでも帰って来るが良い。ここはお前の家でもあるのだからな。」

二人は微笑みながらそう言う。

俺は……本当に幸せ者だ。

「あのさ……俺、一刀に言わなきゃならないことがあるんだ。」

土陽はそう言ってニヤつく。

「……何だ？」

何だろう……？

すごく嫌な予感がする……。

「俺もお前と一緒に劉備の義勇軍に加わるわ。」

「……………はあっ!？」

「いやいやいやいやっ！」

「ちょっと待て！」

「お前、良いのかよ！お前は俺と違って権陽様の隊の副官だろ！？
抜けたらまずいだろっが！」

「大丈夫だよ。義遠様と親父には許可貰ってるし。」

ニンマリと笑う土陽を余所に、俺は権陽様を見る。

「本当だ。コイツがどうしても言うから仕方なくだな。」

そう言っつて権陽様は苦笑する。

「そうなんですか？……………それにしても、また何で？」

俺は土陽に向き直る。

「まあ、俺も自分の可能性つてやつを試したかったのさ。この天下
で、俺は一体どこまで通用するのか…とね。」

そう言っつて土陽は自分の拳を見つめる。

その目は本気のようだ。

なら、俺が口を挟むのは無粋だな。

「まあ、お前がその気なら俺は構わないけど……。」

正直、土陽と一緒に来てくれるのは心強い。

一年間この世界で過ごしたとはいえ、まだ俺はこの世界の常識に慣れてない。

故に、土陽がいれば、かなり助かる。

「話は纏まったようだな？では、一刀、土陽。旅立つ前に、私達からお前達に、餞別の品を渡そう。」

そう言って、権陽様は美玲様に目配せする。

すると、美玲様は奥の部屋から、包み紙に包まれた何かを持っている。

「まずは土陽、お前にはこれをやろう。」

権陽様がそれを渡す。

土陽が包み紙を開けると、そこには黒い武官用の士官服と、襟の部分の濃い水色が目立つ白い陣羽織があった。

陣羽織の背中には、金色の糸で龍を模った刺繍しゅうが施されている。

「これは私が若い頃、まだ義遠様に仕えて間もなかった頃に、義遠

様から貰った士官服だ。私はこれを着て、義遠様や一心様と共に戦ったのだ。」

権陽様は懐かしそうに服を見る。

「……良いのかよ？そんな大事な物、俺に渡して……。」

「良い。むしろ、みつともない格好をされる方が私は困る。」

そう言つて、権陽様は服を渡した。

「……わかった。親父……ありがとう。」

気恥ずかしそうに土陽はそう言つて、大事そうに服を受け取った。

「さて、一刀よ。土陽には私の物を譲ったが、今からお前に渡す物は私の物ではない。」

権陽様は神妙な表情をする。

「そうなのですか？」

てつきり俺も権陽様の物を貰えると思つてたんだけど……まあ、貰えるなら感謝だな。

「これはな……一心様が義遠様の下で将をしていた時に着ていた物だ。」

「えっ？」

……驚いた。

じいちゃんの服がまだ残っていたなんて……。

「この服を纏い、一心様は戦場を駆け抜けた。これもまた思い出の品でな、捨てる事が出来ず取って置いたのだが……まさか一刀に譲ることになるうとはな。本当に何が起こるかわからん世の中だ。まあ、譲る相手が一刀なら、黄泉路の一心様も喜んでくれるだろう。」

そう言つて、権陽様は包みを開けて、俺に手渡した。

包みに入っていたのは、白っぽい灰色の長ズボン、黒のタートルネック、こげ茶色の目立つ詰襟のロングコート、黒革のブーツ。

じいちゃんはこのを着て戦ったのか……。

「茶色の着物の背中をしてみる。」

コートの何か？

そう思いながら、俺はコートの背中を見た。

「っ！」

そこには、銀の糸で刺繍の施された、我が北郷家の家紋、島津十字が輝いていた。

「これは……」

今の俺がこれを着ても良いのだろうか？

……いや、良いとかダメとかの問題じゃないな。

北郷御影流剣術継承者としてじいちゃんを超えるなら、この家紋は背負わなければならない。

ならば、俺の取るべき行動は一つだ。

「ありがたく頂戴致します。」

俺は権陽様に頭を下げ、服を抱きしめた。

着替え終えた俺達は、城の南に位置する城門へ向かっていた。

向かう途中、仲間だった兵達や、城下町に住む民達から温かい声援を頂いた。

……頑張らないとな。

いつか必ず、この温かい人達が安心して暮らせる世の中を創る。

それが、俺なりの恩の返し方だ。

そう思いながら、俺はふと隣の土陽を見る。

いつも使っている弓を背負い、後ろ腰には木製の矢筒を革帯に下げ、その手には漆黒の青龍偃月刀“覇黒”を握っている。

対する俺の武器はただ一つ。

革帯をベルト代わりに使い、千代桜をそこに差した。

出奔の準備は万端である。

「もうすぐ城門に着くけど、別れの挨拶は考えたか？」

俺は隣の土陽に話しかけた。

「そんなもん、考えてるわけねえだろ？その場で感じたことを言うさ」

あっけらかんと言う土陽に俺はおもわず苦笑する。

本当に表裏のない奴だ。

だけど、それが土陽の良い所だな。

一人でそう納得していると、城門が見えてきた。

城門前には義遠様、権陽様、美玲様、莉昂さんがいる。

そして、俺達に乗る二頭の馬が、荷積みを済まして待っていた。

「ほう……二人共よく似合っているじゃないか。」

権陽様は微笑を浮かべる。

「ふむ……二人共、昔の一心と権陽にそっくりだ。まさか、再びこのような光景を目にするとはな……。感慨深いものだ。」

義遠様は顎髭を弄りながらそう呟く。

「一刀、士陽、これからどこに行くか、ちゃんと把握しているかい？」

莉昂さんが俺達の前に立つとそう聞いた。

「はい、徐州の陶商様の城へ向かえば良いのでしたね？」

俺が答えると、

「その通り。今、劉備の義勇軍はそこで補給を行っている。今から行けば、まだ間に合うだろう。」

と、納得した表情で莉昂さんはそう言った。

「そういえば、莉昂の兄貴、義雄さんにはもう話は通ってるのかい？」

士陽は思い出したように尋ねる。

「大丈夫。すでに文は送ってあるし、向こう側からも了解を知らせた文が昨日届いたからね。」

士陽の質問に莉昂さんは即答する。

しかも、俺達の知らない内に、陶商様にも了解を取る手際の良さは流石である。

「一刀、たまには文を送りなさいね。」

美玲様が微笑みながらそう言う。

「お袋……それは俺にも言う台詞じゃねえのかよ。」

土陽は不思議そうな表情をする。

「ほう……ならば土陽、お前は自分の近況をこと細かに私へ説明してくれるのか？」

土陽に向き直り、美玲様は悪戯っ子のような笑みを浮かべた。

「あー……一刀、これは間違いなくお前の仕事だな。俺には向いてねえ。ってか、めんどくせえ。」

「いや、それくらいやれよ。」

俺がツツコムと、義遠様と莉昂さんはクスクスと笑い、権陽様と美玲様は呆れて頭を抱えていた。

「さて……一刀、私から貴公に渡すものが一つだけある。」

「渡すもの？」

義遠様は俺に向き直るとそう言った。

何だろうか？

じいちゃんが使っていた何かがまだ残ってたのかな？

「一刀、貴公には真名がなかったな？」

「まあ……そうですね。」

「それでは何かと困るだろう。故に、私から貴公に新たな名をやる。」

「えっ…？」

新たな名を？

「まあ、そう慌てるな。何も北郷一刀という名を捨てろと言っているわけではない。」

俺の様子を見て義遠様は苦笑する。

改名するんじゃないなら一体……？

「貴公は、妙名を北郷、そして、真名を一刀と名乗れ。」

「妙名を北郷？つまり、俺に新たな字を名乗れと？」

「そうだ。貴公には私から字を与える。私、権陽、美玲の三人で相談し決めたものだ。一つの信念を貫いて欲しいという私達の願いを込めて、貴公の字をいっしん一信とする。」

その読みはじいちゃんの名と同じものだ。

ゾクリとした。

それは俺の尊敬する師の名を継ぐ行為。

今の俺の状況にはピッタリだった。

素直に嬉しい。

また、義遠様達に返さなければならぬ恩が出来たな……。

「ありがたく頂戴致します。今日より、妙名は北郷、字を一信。そして、真名は一刀と名乗らさせて頂きます！」

声を出して新たな名前を宣言する。

俺は決めた。

生涯この世界で生きていく。

この名はその誓いと覚悟の証だ。

「んじゃ、そろそろ行くか？」

「そうだな……。」

俺は土陽の言葉に返事をする、用意された馬に跨がった。

「では、気をつけて行くのだぞ。」

「土陽、一刀、体は大事に下さい。それも兵の勤めつわものですからね？」

俺達を真つすぐ見据えて権陽様がそう言い、その隣で美玲様は美しく微笑む。

「二人共、活躍を期待しているよ。」

莉昂さんはそう言つて優しく笑う。

「貴公らは間違いなく、この乱世の英雄になれる。この私が保証しよう。だから、思い切りやれ。貴公らは無限の可能性を秘めているのだからな。」

義遠様はそう言つて、俺達の馬を押した。

「では、行つて参ります！」

「行つてくるぜ！」

俺と土陽は大声でそう言つと、馬の腹を軽く蹴つて走り出した。

城門から離れていくにつれ、寂しさが込み上げるが、俺はそれを耐える。

ここは俺にとって故郷だ。

いつか、胸を張つて歸つて来れるよう、頑張らないとな。

俺は心にそう誓い、空を見上げる。

そこには、俺達の門出を祝うように、澄み切った青空が広がっていた。

〈第四話〉侍、旅立ちの時（後書き）

まず、遅れて申し訳ない。

言い訳は致しません。

どんな理由があろうと、遅れたことには変わりはないので。

さて、いよいよ一刀君が旅立ちました。

今回は結構悩んだんですね（ω、；）

陶商、陶応の設定はオリジナルです。

一応理由としては、一心さんが関わったことにより、歴史が微妙に変わった、ということにしましたが、ご都合過ぎますかね？

そして、一刀君と土陽君の衣装ですが、戦国BASARAの片岡小十郎と上杉謙信の衣装を参考にしました。

まあ、あまり派手過ぎないように意識しましたが、土陽君は結構派手かもしれん（ゝゝ、；）

さて、ここまで書いてきて、私は重要なことに気が付きました。

恋姫キャラが今だ誰も出てねえwww

これは想定外でした。

本編に入る前に、まさかこんなに書きたいことがあるとは、自分でもびっくりです。

ですが、次回からは出てくるのでご安心をw w

まあ、ここまでが“プロローグ”だったと思ってくださいw w w

では、また次回でお会いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6996x/>

真・恋姫†無双～冷静と情熱の狭間～

2011年11月15日04時21分発行